

東北文教大学短期大学部民話研究センター資料叢書

天とひばり

佐藤家の昔話（四）

編 武 田 正

東北文教大学短期大学部民話研究センター資料叢書

天とひばり

佐藤家の昔話(四)

編 武 田 正

天とひばり

156	155	154	153	152	151	150	149	148	147	146	145	144
貧乏神 (貧乏神二〇二)	蛇髻 (蛇髻入・芋環型二〇二)	木の精のはなし (子供の寿命一五二)	雷さま一家	こぶとり (瘤取爺一九四)	左甚五郎のねむり猫	左甚五郎のかきつばた	左甚五郎の猿	左甚五郎の竜	左甚五郎のねずみ (鼠の名作五八八)	お釈迦さまの涅槃	お釈迦さまの弟子	お釈迦さまの悟り

45	41	38	33	25	24	19	15	12	10	8	6	5
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	---	---	---

佐藤家の昔話(四)

169	168	167	166	165	164	163	162	161	160	159	158	157
宇都宮の吊天井	木下藤吉郎と明智光秀	円山応挙の猪	三平と藤吉郎	疫病神	納豆の由来(2) (由来話・系)	納豆の由来(1) (由来話・系)	日吉丸 (和尚と小僧・系)	長い名の子 (長い名の子六三八)	金の斧と銀の斧 (黄金の斧三二六)	笠地藏 (笠地藏二〇三)	狐むかし (狐の婚礼・系)	団子浄土 (地藏浄土二八四)

101	98	96	92	86	85	84	71	65	62	59	55	48
-----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

170	家光公の輝	105	おなべとおふた	184
171	有村治左衛門	110	一休ばなし	185
172	那須与一	114	彦市ばなし	186
173	口立たぬ娘（長良の人柱六六二）	116	彦市ばなし — かくれみの —	（隠れ養笠四六八）
174	猫の子は猫	120	彦市ばなし — 狐と狸 —	（石肥三年四七二）
175	嫁の屁	121	天とひばり（雲雀と金貸六七）	188
176	東北の食い倒れ	123	茶臼山	189
177	家賃とり（借金取の香典・系）	124	ピョンピョコの助	190
178	キビとアワ	125	阿呆陀羅經	191
179	和尚と小僧	126	あとがき — 採訪ノート（四） —	144
180	小便たれ（出たものは切る六一四）	127		
181	欲ばり犬	128		
182	カステラ	129		
183	嫁の団子	130		

（ ）は関敬吾氏『日本昔話集成』より

話者 佐藤孝一（山形県上山市檜下）
 編者 武田 正（山形県南陽市三間通三三二の三）

凡 例

- 一、語り手の話をテープにとり、忠実に翻刻した。
- 二、表記については発音に最も近い言葉としたが、訛りは一部整理した。
- 三、一、二方言には理解を助けるために（ ）内に共通語を記した。
- 四、順序は聞いた順序とした。
- 五、資料集として編集・印刷をした。

お釈迦さまの悟り

天竺の国さお釈迦さまという、えらい人いだんだけど。お釈迦さまは王様の一人息子に生まつて、何不自由なく、お城の中で暮していだんだけど。ところが、ある日、ふとお城の囲いかこの外をながめてみたれば、百姓やら町人やら、いろいろの人が額に汗して、えいえいとして働いていだんだけど。はいつ見っだお釈迦さまは、たまらなく無常感じて、ものおもいにふけて、ほして山の中さ入つてつて、修行はじめだんだど。

何年も何年もいろいろなこと考え、ほして元着て行つた着物なのはあ、ボロボロになつて、跡形あとがたちもなくなるほど修行したんだけどはあ。その難行苦行の中でたった一つのこと悟りをひらいたんだど。

はいつは何かと言うど、世の中のものとは生まつたり、なくなつたりしない。増えたり減つたりもしない。形が変るだけだ。いわゆる不常不滅の法則ていうのを発見したんだど。三千年たつた今でも、この科学の進歩した今でも、三千年前教え

たお釈迦さまの法則が決して間違っていない。ありがたいこと教えたんだ。どんぴんからりん、すっからりん。

145 お釈迦さまの弟子

むかしとんとんあったんだけど。

お釈迦さまが修行終えて、出定してきた。山から出はってきた。いろいろな弟子を持った。その弟子に離婆多りばたという人と舍利弗しやりほつという二人の兄弟がいたんだけど。兄の離婆多という人あ人よりも一を聞いて十を知る。とても賢い人だった。弟の舍利弗という人は愚鈍で、まあ十を聞いても一も憶えらんね。

ところがお釈迦さまの教育方法というもの決して一つの課題を押しつけねがつたんだ。その個人個人によって、今の言う個性教育をやったわけだ。ほしていろいろ頭のすすんだ者にはすすんだように、のろまな者にはのろまなように教育

した。ほしてこの舍利弗という人が、お釈迦さまに言うた。

「おれみたいな馬鹿、なしてこだい馬鹿なんだか、お釈迦さま、何とも仕様ない」
ほしたら、

「いやいや、ほうでない。明日あしたからお前さこういうこと教えつから、その通りや
れ」

こういうこと言うた。

「なぜしたらええべ」

「ええか、箒たが持つて朝げから夕方まで『垢を払わん、塵を払わん。垢を払わん、
塵を払わん』て掃け」

そして、それが三日・四日と続けた。一週間目の朝、お釈迦さまんどこさ飛ん
できた。

「お釈迦さま、お釈迦さま、分りました」

「そうか」

「垢を払わん、塵を払わんて言うたのは、決してこの外や体を清めるばりでない、

心の中の垢や塵を払うことだったべな、お釈迦さま」

て言うた。

「そうだ、そうだ。よくお前は悟りを開いた。決して人間がなまじつか頭なのばりええったて分らね。お前の兄なの、あだえ頭のええようだげんども、何一つ悟りなてひらけないんだ。お前が、あれほど自分ば、おれみたい分らね、分らねて言うていたなでも、一心になつて勉強すれば、こういう風にお前の兄より早く悟りをひらくことできたでないか」

こういうこと言うたけど。どんびんからりん、すつからりん。

146 お釈迦さまの涅槃

むかし、とんとんあつたずま。

お釈迦さまも修行したり教えたりなんかしてるうち、年波で、寄る年波ではあ、

いろいろな人がお釈迦さまの枕元に集まってだ。んで、お釈迦さまが臨終の、今はの際に、梵語でこういうこと言うた。

「バヤダンマ、サンカーラ」

ということ言うて、黄泉の旅に立つて行つた。そのバヤダンマ・サンカーラということとは、どういうことだかと言うと、常に移り変りゆく認識判断、日本語に訳すると、いわゆる世の中で言うものは、一瞬としてとどまることを知らない、今はすでにもう今ではないということ、ただ一言いうて他界した。それが仏教では諸行無常とか、いろいろなように解釈され、またその宗派宗派によつて、いろいろ解釈さつて行つた。ほしてまた印度ではお釈迦さまの教えの中に、魚や獣類の肉には、あまたの魔性がある。んだから食べっど腹痛くしたり、病氣したりするんだと教えた。んで今さなつて考えてみれば、魔性があるわけじゃなくて、印度ていうのは、温かいものだから、腐敗が早かつたんで、腐敗したもので中毒しておつたわけだ。んだから今でも仏教の仏事のときは、肉・魚を食べない精進料理、あるいは精進・一箸精進なていう行事があるんだけど。どんぴんからりん、

すっからりん。

147 左甚五郎のねずみ

むかし、むかし、飛驒の国に左甚五郎という人いだんだけど。

その人が十三才になったもんだから、工匠たくみで言うて、大工さんさ弟子入りしたんだ。ほうしたれば兄弟子だ。十五・六人いだった。で、師匠はんが、

「お前ださ、一週間の余裕を呉けつから、ねずみ彫ってみろ、誰一番上手だか、一番上手に彫った者さ、御褒美けつから」

ほうしたれば、次の日から、みな一生懸命松の木を削ったり、櫓けやきを削ったりして作り始めた。甚五郎は遊んだり、ノミ研ぎしたりばかりしていて、なかなか彫らね。ほうしていよいよ明日で七日目だていう夜から、彫り始めた。一晚で彫ったもんだから、本当の荒彫りしか彫らんねがった。

ところが、他のあまた弟子どもが彫ったな、いや、すばらしくトロトロ磨きかけて、トクサというもんで磨いて、ちよつどツクツクシのスギナみたいなトクサていうな、原前に生えておった。それを取ってきて、一生懸命に磨いた。まず、「これ一番だべ、あれ一番だべ」

て、みな評判になつてゐるうち、ヒヨロツと出したのは、まるで荒彫りのねずみだった。ところが、次の日いよいよ審査でなつたら、その師匠はんが猫一匹連て来て放した。ねずみだから、猫がくわえんのが一番と、本物に似たものに相違ない。ていうわけで、その師匠はんが猫放した。ところがウウゝて、いがんでいたけあ、甚五郎の彫ったねずみば、いきなりくわえた。

なして、あだな荒彫りの、面くさいな食^くわえだべなあと思つてだ。ところが、ほのねずみの材料が鰹節だった。んだから格好なのどうでも、鰹節食だいはっかりで、猫はねずみばくわえて行つたわけだ。んだもんだから、一週間も前から彫つてつど、みんなに悟られつから、明日ていう晩彫つた。それだけ左甚五郎という人は、腕ばつかりでなく、頭もええ人だけど。どんぴんからりん、すつからりん。

148 左甚五郎の竜

むかしむかし、左甚五郎が弟子離れして、江戸さ行つて修行すんべと思つて、江戸さ出はつてきた。

ところがたまたま、その時、

「上野の寛永寺さ竜を納める。われと思わん者は竜を彫つて出してしろ」

と、品評会を開いて、一番ええ竜を納めるという触れが出た。ほして、あまた工匠^{たくみ}たちは腕によりをかけて、材料をそつちこつちから集めて彫りはだった。大体一月ぐらゐの余裕があつた。

左甚五郎は竜というものは實際見たこともない。絵本や何かでは見たこともあつけども、んで、何とか一つ、竜を見てみっだいなて言うわけで、浅草の観音さまさ、穀絶ちして一週間の願をかけた。三日・四日、何ごともなかつた。五日・六日になつた。ほんでもまだ観音さま、竜を見せて呉ね。いよいよもつて満願の一週間目になつた。

ところが、ちよつと右の方見たれば、不忍の池の水が渦巻いてだけあ、むつくりと高くなつて、そこからすばらしい竜が頭出して、こんどは浅草の観音さまの屋根のどつから、紫の雲がたなびいた。それさその竜がのつて、登つて行くすぎまじい竜の姿、まざまざと見た。

「ああ、すごいなあ」

と思つたれば、はつと目覺めた。ところが一週間も穀絶ちしたもんだから、腹減つて腹減つてはあ、ふらふらとなつて、そこさ倒つていだんだけどはあ。ほして、

「ああ、分かつた。あの姿だ」

て言うわけで、家さ歸つてきて、御飯食べて、ノミ研いで、そして材料さ向かつて彫り始めた。もう期間もないもんだから、やつぱり荒彫りだった。

いよいよ品評会の日、ずうつと並べたら、他の彫刻師、大工だ、その連中だ、みななのしつた。

「何だ、こだな竜でないべな、こだなおかしなもんだ」

て、悪口して一番端の方さ押つつけらつていだけどはあ。

ところが、いよいよもって審査の日がきた。ところが三代將軍徳川家光公を先頭に、あまたの役人が、うしろさゾロツと従いて、ソロリソロリと、次から次を見て行つた。ところが一番最後の左甚五郎彫つた竜のどこまで行つたら、將軍さま、「あつ」と声上げてたまげた。いかにも、今にもとびかからんばかりの竜のすざましさに、度肝拔がつた。「やあ、これだ」というわけで、その荒彫りの竜が上野の寛永寺に納まつたわけだ。

ところが、夜な夜なそれが水飲みに出はつて、不忍の池さ行く。そして一般の人が、

「いや、竜いだっけ。いや、恐つかながつた」

て、いろいろ竜の話で持ち切りだ。「ほだなことないべ」て、左甚五郎、行つてみたら、やつぱりポタポタと水の音して、朝げになつどちやんと寛永寺の門に納まつてる。んだげんども、どうもその竜の体がしつとりとぬれて、ポタポタ、ポタポタと水落してる。うろこが濡れている。

「いや、これは、みなさんをお騒^{さわ}せしては申しわけない」

て、左甚五郎はノミを打^ぶってやつて、眼^{まなこ}さ当てた。ほうしたらその次の日から、竜は不忍の池さ行^いつて、水浴びしねぐなつたけどはあ。今でも上野の寛永寺の竜は、片^{ひと}つ方、ノミ傷あるんだけど。どんぴんからりん、すっからりん。

149 左甚五郎の猿

むかしとんとんあつたずま。

左甚五郎は、こんど腕も相当上げたもんだから、東下りすんべと思つて、ほうしてずうつと降^{くだ}つて行^いつたれば、あるところに、大工の現場があつたつけ。ほうしてほこで、ぼやつと立^たつて見^みつた。黙^{もく}つていればええことを、何とも、ほれ、他の大工だ、すつこと見るに見兼ねて、身ぶり手ぶりで真似^{まね}してみつた。

ところが、はいつ、職人だ氣にして、

「何だ、こりやこりや、何、他人ひとの仕事だまって見てる」

また、左甚五郎ぐらい人相の悪いな、なかったんだど。まあ、帯を下の方さして、ヘソ出して、ネギ鼻つうとメメグラがして、ぼさつと立っていてがらざあ、とても受け取らつだもんでない。ほして、

「何だ、ぼやつと突つ立って、何見ているんだ」

「お前の頭下がった。ほら、そっちなな、尻あ下がった」

尻のさがり具合言うてしまった。ほうしたれば、その職人だ、ごしやえで、
「この野郎、にさ、分かんねなだか」

叩がつでしまった。一つ二つ三つ……勘定しつたど。叩がつだ数をな。

ところが、はいつさつきから見つたその棟梁が、

「こりやこりや、にさだ、この人叩くほどの腕持つてつか。この人は、おれ見でつど、目の配くばりがちがう。体のこなし違う。お前だ見る。ほりや、頭が下がつてだと言うど、そういう風な板の削り具合だ。尻が下がつどそういう風だ。この人にちよえつと習つてみる。この人は相当の腕だかも知んない。どうだ旅の職人さん、

一つカンナ使い教えてもらわんねか」

ほうすつど、左甚五郎は機嫌をなおして、

「棟梁、おれなど、本当は下手なんだげんども、棟梁からそう言わつてみつど、
んだら一つ削らせてもらうべ」

て言うわけで、風呂敷からカンナ出して、右手の拳こぶしでトントンとそのカンナの
齒叩いた。ほして、お空さそれを向けて、高い低い見て、すっかり見てこれでよ
しとなつたら、削り始めた。ほうしたれば魂消たことには、和紙と言うから、高
松奉書紙だいほうみたいな、麻布のようなカナガラ屑がしゅうしゅうと流れて行く。

「いやいや、これはすごいもんだ」

と思つてみつたら、それピタツとくつつけた二枚の板、ほして、

「ほらほら、誰でもこいつ、はがしてみらつしやい」

て。はがすと思つて、いきなりはがして、「はがした！」て言つたのが、板でな
くて生爪なえだった。何たつてはがれるもんでない。それだけ空間がないわけだ。ノ
ミ四丁・五丁か掛つて、テコにしてやつとはがした。はいつ見つた旦那さま、

「何とか、ここは何時いつの何日いつまで仕上げる住宅だげんども、あなたに一つ手貸してもらいたい

て、こういうわけで頼まつた。

「いや、おれあ何にも分んねげんど」

て言うて、次の日から始まつたのが、一番上の棟木の溝ほぞと穴と、そこさ一週間かかった。一ヶ所さ、いや、なんぼなんだてこりや、一週間かからつでは大変だと思つた。んだげんども、まず、何とも仕様ない。ほしてねつく見たれば、ほの溝ほぞさ猿こ千匹彫つていだけど。

「猿こ、千匹なて、何なるんだい」

て、弟子どもだ、いだったそうだ。ところがそこの部落が大火に会つて、いわゆる片っ端から燃えて行つた。ほしたら左甚五郎が溝彫つた家だけは燃えなくて、他の家だけ燃える。

「おかしなこともあるもんだなあ」

て思つて見たれば、ほの千匹彫つた猿が一匹二匹、その溝から出はつてきて、

水汲みして屋根さかけんなだけど。ワツシヨワツシヨて、猿こはしてその家だけ残った。んだから名人がすつど、どこか違つたどこあるもんだて言うけど。どんぴんからりん、すつからりん。

150 左甚五郎のかきつばた

むかしとんとんあつたんだけど。

左甚五郎が、こんどはまたずうつと降^{くだ}つて行つた。もう日もとつぷり暮れたもんだから、旅籠屋さ上がつて行つた。んだげんどノミとカンナと木槌、そういうもの一からげにして、ほして、番頭さあずけた。

旦那と番頭は、はいつ錢だと思つて、毎日上酒出して、刺身よ焼魚よて、大盤振舞いしつた。なんぼおもつても錢払う気ない。

「あいつあ、本当の錢だべか、番頭さん、番頭さん」

そおつと内緒で開けてみたれば、減ったカンナとノミと木槌など入った。
「いやいや、いっぱい食った。なんぼこだな取ったって、分かんねっだな」
て言うわけで、

「やっぱり人相悪れし、ろくな着物きてねし、あの格好の悪れごと、でれつと目尻下げてまず、ネギ鼻めめぐらがして、何とほだな銭もってねど思った」
番頭と旦那、喧嘩始まった。

「にさ、悪れがらだ」

「んだて、旦那さま、相当な目方だから、金いっぱい入ったようだなて言うから、安心して泊めだったな」

「いやいや、困ったこと始まったもんだ、おいおい」

お客さまなんて言わないで、甚五郎の部屋さ行つた。

「何だ、あだなもの帳場さあずけて、毎日贅沢さんまいにふけってる」

「番頭さん、番頭さん、ここに竹林あつか」

「竹林さあ何だ、竹のことなど聞いていねのだ」

「いや、竹林あっか」

「竹なのあるっだな。内庭にある」

「ああ、ほうか、ほんで安心した」

「安心したなて、何して安心した」

「んでは明日から仕事にかっから」

「仕事にかかるなて、おら家では旅籠屋だから、仕事などしてもらっては困る」

「いや、番頭さん、短腹起すな、今、お前の家さ損させねで置いて行くのだから」

ほして竹ば切ってきて、何すっかと思つたら、次の日から削り始めた。削り始めたら、カッコ花を彫刻した。かきつばただ。ほして番頭さ言うた。

「ええか、番頭さん。このかきつばたなあ、水呉^ければ、パールと開くし、乾燥して置くど蓄になるし、長く持つから、こいつ、表さ飾っておがっしやい。んだど、その気のある人はすばらしく高く買つてけっから」

て言うた。

「かつじえげだなもの、ほだい買うもんでない」

「いや、ほでない。おれはこれで失札すつから」

「お前みたいな奴は、いればいるほど費用かかつから、ちやつちやと出て行つてもらわんなね」

ほして追い出さつた。

ところがそんな時、「下に、下に」て、殿さま通りかかつて、その殿さま見^めけだのが、かきつばた、

「あれを買つてまいれ」

ところが家来の者が行つた。ほして、丁度それまで飲み食いたな三両がな、
だつたそうだ。そこで家来が、

「これ、番頭、このかきつばた、なんぼだ」

番頭はちよつと三本指を出した。ほして、家来が殿さまさ語つたれば、
「そうか、三百両は安いもんだ。買つてまいれ」

いや、家来はぶつ魂消た。ほして行つたれば、その宿でもぶつ魂消た。

「んだらば、あの、お泊まりになった人、誰だべ」

「これは、この細工するのは日本国中でたった一人、左甚五郎という飛驒の工匠だけだ」

て、殿さまは目が高かった。そして三百両でお買い上げになった。生かきつばたつて言うて、それが水させば花開く、乾燥すれば元の薔になる。こういう仕組みのやつ彫つて行つたわけだ。ほんで宿でもぶつ魂消た。ほして、

「いや、左甚五郎さまざあ、すばらしい腕の人だ。今度お帰りになつどき、ほの余分の金お返しして、お礼申上げんなね」

て、待つていだけど。どんびんからりん、すつからりん。

151 左甚五郎のねむり猫

むかしとんとんあつたずま。

宇都宮さ東照宮というお寺建てて、そしてその奥の院さ権現さまと称して、徳川家康のお墓建てて、安らかにそこさ眠らせると、こういうわけで陽明門さ鳴竜の間、いろいろなすばらしい建築がなされた。ほして將軍家の計画で、そこから奥にはねずみ一匹通さないと、こういう風にするためには何故したらええがんべ、んでは今をときめく左甚五郎にお願いしたらええがんべ。こういうわけで左甚五郎が頼まつた。

そして左甚五郎がそのねむり猫を彫つた。何だかちよえつと見つどつまらねようだけんとも、いざ欄間のどこさ上げてみたれば、本当のねむり猫だ。生きつた猫と同じだった。今にも牙むき出して、ねずみさどびかかるような、何ともものすごい猫が彫り上げらつて、ほしてそこさおさめらつてがら、そつから先さは、ねずみ一匹行がねがつた。ほして、ますます左甚五郎の作ていうのは、天下さ名

声を博したんだ。どんぴんからりん、すっからりん。

152
こぶとり

むかしむかし、あるところに一人のじんつあがいだっけど。そのじんつあの類つべたさ、夏みかんより大きな黄色いコブが一つぶら下つていだんだけど。

「見つともないコブだし、邪魔になるなあ」

なていだんだけど。して、そのじんつあがコブあるため、人さ会うのも嫌^やんだもんだから毎日山さ行つて、ほして柴刈ったり、薪拾ったり、毎日山さだけ行つては、人さ会うのあんまり好まねんだけど。んだげんども、おじいさんが歌うたつても歌もうまくないし、こりや何か一つ憶えておっかなあ、というわけで踊り習つたんだ。

へああ、スッチョイスッチョイ

スツチヨイナー

なて、なかなか手振り身振りがええがった。ほして、何よりの趣味として、その踊りおどんのを楽しみにしつたんだけどはあ。

して、ある時、おじいさんが、

「いつものどこに、あんまり焚物落つでいねがらはあ、少し奥さ行つて見つか
なあ」

て、ずうつと奥まで行つてみたれば、何だか山がにわかになどに今度は空悪くなつて曇つてきて、雷らいさまはらんだ雨と風とものすごくなつてしまった。

「こりや、うまくない。ほこらに洞穴ほらないべか」

て言うわけで探したれば、大きい木の洞穴あるんだけど。

「ほんでは、ここさ雨宿りして、晴れんな待つていんべなあ」
て言うわけで、そこさ入つたんだど。

「こりや仕方ない。今夜ここさでも寝つか、どうせこうせ、このほつぺたのコブ枕にして眠んべなあ」

て言うわけで、その夏みかんタンコブ枕にして、ほしてトロトロって眠ったと思つたれば、お月さまの光が洞穴の中さ、さし込んできたわけだ。ほしてええお月夜になった。ほして見たれば、その洞穴の前が何だか広場みたいになつていだんだ。したば何だか人の声みたいない歌い声なの、笑い声なのきこえる。何だべと思つて、ちよつと音のする方さ耳かたむけてみたんだ。ほして音のする方見たれば、いや、おじいさん、ぶっ魂消たんだ。膝カクカクて言うて、心臓とかかて言うた。それもそのはず、ほのおじいさんの前の広場で、赤鬼・青鬼、車座になつて何だかお月さま眺めしただけ。ほしてよく見たれば何だかおかしげな茶碗みたいな出して、ドブロクみたいな注いで酒盛りなどしてだんだ。けど。

一人一人みな虎の皮の褌して、筋骨隆々とした鬼なんだ。ほして酒がぶがぶ飲んで、歌い始めだんだ。したれば赤鬼が出て踊ったり、黒鬼が飛び出して肩組んで踊ったり、いやまず、ほの踊りの下手なことった。んだげんども、楽しそうに踊りおどる。手振ったり足振ったり、いろいろやった。

ほだいでいるうちに、ほのおじいさんがむやみに踊り好きだから、いつかふらふらと自分も踊りさ巻きこまっで行ってしまった。ほして、いつの間にか手足動かしていた。はいつ見ただけあ、鬼どもぶっ魂消げた。何者出はつてきたと思つて、見っど人みたいだげんど、右のほつぺたさ、黄色い袋なえなのぶら下げて、はいつから、手裏剣でも出してぶつつけられるんでないかと思つたんだが、何だか知しやねげんども、まずはあ、ぶっ魂消て逃げ出すべと思つた。ところが、かかつてくるどころか踊りおどつてくる。ほの踊りはとつても上手だ。上手なはずだ。本職について習つた。鬼の我流踊りとちがうわけだ。

そんな無骨なぎこちない踊りとちがう。腰つき、足つき、目のくばり、何とも言やない踊りだ。ほして一つ踊れば鬼どもはものすごく拍手喝采した。ほしてにこにこ、にこにここと笑いながら、鬼も、ほのおじいさんさ従いて踊つた。ほして環になつて踊っているうちに、じんつあもはあ、調子さのつて、

「どうだ、上手だったが、おれの踊りは」

て言うたれば、鬼ども一同、拍手喝采を贈つたんだ。ほして「上手だ、上手

だ」て、みんなして賞めだ。

「月夜の十五夜の晩が、いつでもここで踊っから、ちよいちよい来て、踊って呉けねがぁ」

て、鬼に頼まっだんだど。おじいさんも人がええもんだから、

「ええっだな、踊っだな」

「んだげんど、じんつあ、きつとおらだば恐かないだの、煙けふたいだのて来ねがも知んねえからて、何か大事なものあずかつて置かねくてはなんね」

「いや、おれなの、貧乏して大事なものなて、山刀・鎌、こだな減ったなしか無いし、何一つない」

「いや、ほだな、じんつあ来ね気だな、誤魔化しても駄目だ。右のほったさ入ったな、はいつ、夏みかん色しったな、そいつの中さ金きん入っていたべな。よし、ほいつあずかつておくから」

「いや、ほいつはタンコブだ、タンコブだ」

て言うたど。

「ほだな大きなタンコブあるもんでない。はいつきつと黄金入っていた。金入っていた」

て、鬼の頭かしらきかねんだど。ほして子分の赤鬼さ何やら囁いだんだど。したればその痩せつた赤鬼あ来たけあ、いきなりその夏みかんみたいなタンコブ押えだけあ、千切り取ってしまったんだけど。して、おじいさんが「あら」と思ったげんど痛いつだくも痒かいぐもないがったんだど。ほして魂消て、キョトンとしたればそいつ取つど安心した鬼どもは、また一生けんめい踊った。こんど、今まで邪魔になつて邪魔になつて仕様なくて、人前さも出らんねくていたな、取つてもらつたもんだから、おじいさんもうれしくなつて、また踊った。こんど踊りは前より一段と冴えていたわけだ。

「いや、日本一の踊りだ」

鬼から賞めらつた。ほだいしてるうちに、何だか東の方の空、白みかけた。ほんで人來つどなんねえて言うわけで、鬼どもは引き上げて行つてしまった。ほうして、おじいさんが喜んで帰つてきたわけだ。

ところが、ほの村に左のほっぺさ、やっぱり夏みかんぐらいなコブぶら下げっ
だおじいさんいんだだけど。ほのじんつあの、また欲ふかいこと、あっちの方に、
もうけぞく（もうけ口）あつど、人ば吹つとばしても行つて、一番早く、ほこさ
行くんだだけど。ほして考えだんだど。

「ようし、そういう話だら、おれも一つとつてもらつて来らんね」

ほうして真暗くなんの待つてで、山さドダドダと走つて行つて聞いたとこ、す
うつと行つて、平らなどこさある洞穴の中さ隠つていたんだど。ほしてまだお月
さま出ねべか、まだお月さま出ねべかと思つたれば、大きなお月さまがばあつと
空明るくなつて出はつてきたわけだど。

ほうしたれば、鬼だ、やつぱりドロク持つてきて飲み始めたんだど。気の早
いのあ、テクテク踊りはじめたんだど。

「ようし、ぴったり、かやかったり」

ていうわけで、穴からいきなり出はつてつて、一つ踊つて呉^けましようど、ここ
だと思つて、ほしてそのおじいさんがいきなり洞穴からとび出して行つて、踊り

始めたんだど。んだげんど、稼ぎ仕事や、もうけぞくにや一生けんめいになって走り廻つて歩つたけんど、踊りの「オ」の字も知しやね。

「なあに、構^かむことない」

て言うわけで、足と手動かしてみた。ほっちゃやったり、こっちゃやったりしたげんど、鬼だ、決して感動しねがったど。あきれ返つてがっかりしてしまったんだど。したけあ、

「何だ、かえつじえげだな、下手なじんつあ、昨日のじんつあとちがうようだ。かつじえげだなじんつあ居つど、酒もうまくないし、踊りもろくだなこと踊らんねから、ちやつちやどはあ、帰してやれはあ」

「かえつじえげだな下手な、毎日来つどなんねがら、昨日取つてだ、みかん茶の袋返してやれはあ」

て言うわけで、昨日、よいおじいさんから取つた袋を、やせつだ鬼は持^たつて来たけあ、ピシャーリとぶつつけだけあ、右の方さ、そいつあピシャツとくつついでしまったんだど。ほして右と左さコブぶら下げながら、鬼から、

「ちやっちやと行げはあ」

なて、ごしやがれごしやがれ、森の中から涙こぼしながら、ふらりふらりて家さ帰ってきたんだけどはあ。んだからあんまり常平静、欲ふかくしたり、意地悪るくしたり人の真似したりさんねもんだけど。どんびんからりん、すっからりん。

153

雷^{らい}さま一家

むかしむかし、あるところに百姓の一軒家あつたんだけど。ところが突然その家のおつつあんが、

「かか、かか、明日、伊勢詣り行つて来らんねぐなつたず、これ」

「なんだず、おつつあん。ほだな、明日明日田植えていうどき、伊勢詣りざあ、あんまいず。田植終つてから伊勢詣り行つて呉^けらっしゃい」

「いや、昨夜^{ゆんべな}、枕神立つて、今のうちに行かねど、御利益ない。ぜひと来いて

お伊勢さまからの枕神、昨夜立ゆんべなったから、行かんね」

「二日・三日待ってて途中一生けんめい急いで行ったら、一日・二日なの何とかなるんねが」

「いや駄目だ、行かんね」

かあちゃんが押えんな振り切ってほして、出かけて行っただんど。どんどん、どんどんお伊勢さまの方さ行った。ところがある時、山道さしかかった。その山、だんだん高くなって行く、雲かかったどこまで行った。ほして日もずんぶり暮れてしまった。

「はあ、こりや暗くなつた。どさか泊めてもらわんなね」

ほこら見たげんど、木の洞穴もないし、

「どさ行ったら、ええがんべなあ」

と思つていざれば、向うの方からチラチラと灯りがゆれて見える。

「ああ、あそこ一軒家だな」

て言うわけで、そこさ尋ねて行つて「今晚は、今晚は」て言うたれば、「おつ」。

したれば、すばらしい体格のええ人いだっけ。

「実はこういうわけで、お伊勢さまさお詣り行くんだげんど、何とか今夜一晚泊めていただかんねべか」

「いや、そういう都合ならば、なかなか御愁傷なことだから」
なて、

「ちよつとお尋ねすつけど、お宅は何ていう家だもんだべつす」

「うん、おれはこの主で五郎右衛門あるじて言う、家の家内は、為五郎・清五郎・吉五郎。みな五郎の付いた奴ばかりだ」

「ほうでやんすか、どうか一晚お願いします」

次の朝げになった、ほしたら、

「ああ、お客人、お客人、今日からおら家の田植えで水足んねくて、何とも仕様ないから、手伝ってけらっしゃい。水汲み手伝ってけらっしゃい。明日まず田植したいから」

「旦那はん、田植なて言うげんど、こだな山の上、どさ植えるんだ」

「いや、雲さのつてける」

「雲さのつて、なて、どっちや行くんだつす」

「ええ、まず、ずうつと行つて呉^けらっしゃい。実はおら家では雷さま一家だ」

「やつぱり、みな五郎名付いっだ。ほに。五郎右衛門・吉五郎・為五郎・清五郎て、五郎名付いっだ人ばかりっだ。なるほどなあ、んじゃまず雲の上さ田植すんだか」

「うん、雲の上だ。百姓したり何かえしたり居つけんども、一天にわかにかき曇り、ほら雨降らせたり、風吹かせたり、いろいろ雷さまさお手伝いすんなねなだ。

言うなればおらえの家は、雷さま一家だ。ほんで下界の方は、まだ天気で雨も降らせんたつてええし、風も出さんたてええから、今日、お前は水汲みして手伝つて呉ろ」「はい」

て、一生けんめい水汲みしつた。

「ええか、このバケツで、たつぷり汲むど、重みでうまくないから、雲から足つっぱずしたりすつどなんねから、この小っちゃこいバケツで、何べんも何べんも汲

んで呉らっしゃい」

んで、ほのおつつあんがそいつ見っただけあ、

「かえつじえげだな、小っちゃこいなさ、つうとばり持ぐな、めんどうくさいから」

て言うわけで、土の上に居たような気持でいっぱい水汲んだれば、ほの雲から足ひっぱずして落っでしまった。いや、すつと上から落っでしまった。このまゝんまでは死ぬか生きつか分んねがら、

「雷さま、助けてける、助けてける、おれどこまで落っで行んか分かんねはあ、いやいやひどいもんだ」

て言うたらば、そのかあちゃんに、

「なんだまず、とおちゃん、何、ねぼけでいんなだまず」

ほして、はつとして目覚めてみたれば、夢なんだけど。んだから田植ん時、ほっちゃ行ぐ、こっちゃ行ぐて言わねで、家の田植、まじめにすんなねけど。どんぴんからりん、すっからりん。

154 木の精のはなし

むかしあるところに、おつつあんとおかちゃんがいだんだんだけど。ほしておつつあんが山さ焚物とりに行つて、おかちゃんは百姓仕事したり、家の仕事したりしていたんだど。

ある時、おつつあんが山さ行つたらば、急に暗くなって、大粒の雨、どしやぶりになつてきた。何とも仕様ないから、木の洞の中き隠つて、にわか雨しのいだんだど。

ほだいしているうちに暗くなつてしまつたんだど。ほして何だか梢が鳴るような、おかしげな音するなあ、と思つていたれば、木と木のすれ合いだべかなあと思つたら、何だか話声きこえるんだけど。

「おお、みんな歩えべ、みんな行くべ」

て。何だべと思つたれば、

「今日はここの下の方の村さ、おぼこ生まれつから、そいつの産声、あが泣き聞

きに行くべ」

したれば、ほの洞穴の木の精が、

「ちよえつと、おれ、ここさお客さま来ったから、おれ行がんねがら、みんなしで行つて、聞いてける。ほしておれさ教えで行つてける」

て。はいつ、峯の一本松さん、沢の朴の木さん、中のかえでさん、もみじさん、木の役員しつた人あ、みな里前さ下つて行つて、その産声聞きに行つたんだど。ほして子ども生まつて、その産声の泣き様で、その人の寿命がわかるんだど。ほして、木の精だ、みんなして聞いっだれば、やつぱりおぼこ生まつて泣いた。ほうしたれば、

「その泣き方、よつく聞いっだら、七年しか生きらんね。ほつから先はどうもうまくない。困つたもんだな。何とかうまい方法ないべか」

その木の精だ、みんな話ながら帰つてきた。ほして洞の一番大きい木の親方さ報告していった。

「実は、この下の里さ、おぼこ生まつて、あが泣きをみんなして聞いっだれば、

何だて七年しか生きらんねおぼこだ。何とかええ方法ないべかて、みんなして考えて、いろいろな天の神さまから何から聞いてみたれば、ほの七年目んどき、酒飲ませて、んだどまた八年生きる。ほんどきに餅食せつど、こりや寿命まで生きる。こういう風になつたてばよ」

「はあ、ほうか、んだらほいつ、なぜして教えつだいもんだなあ」

て言うの、木の洞穴の中さ入った人、聞いたんだど。次の日夜明けつど、

「ああ、木にも精でいうのあるんだな。何にも知しやねでいだげんど、木だ、みな相談して人間ば長生きさせて呉^けるつもりでいるんだな、こりや」

と思つて、一番大きい木さ一晚の宿のお札を申し上げて下つてきた。ほして来てみたれば、やつぱり自分のかあちゃんが腹大きいがったもんだから、産婆さん頼んでおぼこ産して、安産していだつけ。

「ははあ、あとここの村で、どこかさおぼこ生まつたどこあんべか、産婆さん」
て聞いだれば、

「お宅だけだつす」

て言うた。

「ほんでは、おら家の子どものことだんす」

て言うわけで、七年間たつて、ほして酒飲ませ、こんど十五年目には餅食せだ。ほうしたれば、その人は順調に難なく、木の精の言うた通りに天寿を全うしたけど。どんぴんからりん、すっからりん。

155

蛇

聾

むかしむかし、ある村に一人のきれいな娘いだんだけど。ほしてそこにはおつつあんもおかちゃんも居で、百姓して暮したんだけど。ところがその娘が年頃になつて、夜な夜なうなされる。その苦しみ方は普通でない。

「おかしいこともあるもんだ」

て言うわけで、おかちゃんが聞いてみたんだと。

「何だ、あの、お前、苦しみ方普通でないぞ、何してるんだ、夜」

したれば、その娘は、

「おかちゃん、実はおれさすばらしい男が通つて来てけんのよつす」

「通つて来てけんのよつすなて、どこの人だよ」

「はいっ分かんね」

「どこの人だか分んねな、お前さ通つてくるなんて、ほだなさ身まかせているなて、とんでもないのっだな」

「んだげんど、おら、あの、腹大きくなつて五か月もなるなんて、おれさ黙つてで、ほんだら仕方ない、どこの誰だか分んねごんだらば、今晚来たらば袴の裾さ針さ白いシツケ糸を通して、ほして、はいっ袴さ刺してやれ。ほして次の日、その木綿糸ずうつと辿つてみつど、必ず分るはずだ。ええか、そういう風にするんだぞ。どこの人の子どもだか分んねななど産^なしてみる、一生、お前、父^{とて}なし子産したなて言うて、うだつ上がんねがらええか。こういう風にしてすつかりした夫婦^{めおと}になんねくて、なんねっだな」

て、おかちゃんと言うたんだど。ほしてその晩もその男がたずねてきて、帰って行くときに用意した、そのシツケ糸通した針、袴の裾さ二針・三針ぬってやった。ほして次の日、母親と二人して、その木綿糸、ずうっとたよって追っかけて行つた。もしその若い者とめぐり会うことできたら、いろいろ相談して、式とか何かいろいろあることだから、母親も一緒にについて行つた。ほうしたら大きい岩のかげで、ごろやらで、すばらしいところさ行つたら、コヤコヤ、コヤコヤで、物語りが聞えてきた。ほうしたれば、その若者の親らしい者が、

「何だお前、なまじつか人間さなの恋すつからこういう目に会う。もう蛇に対して鉄は大毒だ。針なの刺さつてから、とうてい助からねはあ。とんでもないことしたもんだ」

「んだげんど、おつつあん、おれも後継あとしぐり、こしやえて来たもはあ、死んでもくやしくないもはあ」

「いやいや、ほだごと言うたて、人間ざあ賢いもんで、すでに三月だ。三月節句ともなれば桃の花咲く、その桃の花煎じて酒さ入つて桃酒にして飲まれるんだら

ば、ほだな、お前こしやえてきたおぼこなど、みな即座に落つてしまふはあ、ええか、人間ざあ賢いもんだぞ、決して油断なんねえもんだ」

結局、その通つてきた男というのは、男に化けてきた蛇だったんだ。ほして針刺つだもんだから、苦しんではあ、いま少しで死ぬばりになつていて、ほして父親から意見さつていたところ、そつと聞いてきたんだ。それつていうわけで、きびすを返して娘と二人は、こけつまろびつ走つてきて、ほして桃酒作つてその晩のうちに飲んだ。ほうしたら次の日、なんぼもなんぼもその蛇の子がゾンゾンと落つてつた。そしてはあ、スカツと落つてしまった。ほして夜な夜な苦しまねぐなつて、今度は世間さ何にもわからなくて、そのことすんだわけだ。んだから今でも三月の桃酒というのは、体の毒気はらいだど。そういう邪気ばらいだと、こういう風に言つて、女衆おんなの飲んだもんだど。どんぴんからりん、すつからりん。

156 貧乏神

むかしとんとんあつたずま。

あるところに、じんつあとばんちやいだけずま。ところがこのじんつあとばんちや、なんぼ稼いでも稼いでも、うまくなくばり行つて、逆手逆手とばり行つて、銭残らね。

「不思議なこともあるもんだな。じんつあ、じんつあ、こだえ銭残らねごんでは、何とも仕様ない。ほがらかに、二人一生送んべはあ。まさか飲まず食わずで、作さえ、ええあんばいだど、食つて飲んで生きられんべから」

て言うわけで、

「ほだほだ、ばんちや、ほうしてはあ、のんきに暮すべなあ。今からそう長生きもするわけでないしはあ、ええがんべ、ええがんべ」

ほして、ある年とりの晩、ばんばんと手叩いてお詣りした。そしていつでも神さまさ、正月ていうど、酒と餅と納豆上げるんだけど。ほんで年とりの晩、はい

つの準備したわけだ。ほして歳徳神さまさお神酒いっぱい上げて、お祈りしたれば何だかおかしげなもののドサツと落つてきた。何だべと思つて、何落つて来たべと思つたれば、その落つてきたものは物語りはじめた。

「じんつあ、ばんちゃ、実はお宅さ、とり憑いっただおれは貧乏神だった。おれ、いたからお前の家では、なんぼ稼いだて錢もたまらねがつたし、事業はうまく行かねなだった。んだげんども、おれはお宅さととり憑いっただげんども、お二人ぐらい、まずほがらかで、ほして、あだいひどい目に合つても決していじけないで、ほがらかに暮している人さ、とつてもはあ、憑き飽きたから、今日限り福の神と交代すつから、よろしく福の神ばお願いしますはあ」

て言うけあ、そのドサツと落ちたものの、なくなつてしまつたんだど。ほうしたけあ、福の神さま、今度あ来たわけだど。ほしてじんつあとばんちゃ、

「福の神さま、福の神さま、なにまず、おらえの家さ来てけだつた。なぜすつど錢は溜るもんだ」

開口一番聞いてみたんだど。したば、

「いやいや、何もほだなこと聞くことない。今まで通りでええなだ。家内和合、夫婦和合くらいええ金貯めないなだ。こいつあ千両箱、二千両箱にもまさるもんだ。こんどは貧乏の神さ代わって、おれあ、お前の家さ来たから、まあ、心配ない。今まで通りの氣持忘れねで、おつかえしていただきたい」

「いやいや、どうもどうも、まず」

て言うわけで納豆と餅とお神酒と上げてお詣りした。それからその家あ、やることなすことみな順調で、ほして、

「さあ、福の神さま、今日は今日で、ええがったす。さあ福の神さま、何の方ええがった」

て、ええことずくめだど。んだから、たとえ少々貧乏しても決していじけねで人さ迷惑かけねで、ほがらかに家内中明るく仲よく暮すことが、本当の千両箱だし、福の神だて言うこと悟ったんだけど。どんぴんからりん、すっからりん。

157 団子浄土

むかしとんとんあつたずま。

あるところにじんつあとばんちやいだけずま。ほうしてその年あ何だか作ええなくて、ええ米、うまく穫んねがった。屑米みたいなばりだった。

「んだげんども、こりや、ばんちや、ばんちや、お八日には地蔵さまさ団子上げつだった。まず、悪い米だって、地蔵さまに勘弁してもらつて団子上げんなねべなあて言うわけで、じんつあとばんちや、粉はたいて、ほして、はいつば練つてセイロでふかして団子搗きはじまつた。ほして腰のし、腰のし、団子搗きして、ばんちや丸べた。ほしたれば何の拍子だか、ばんちやの手から団子ひよろつと、転げて落つてしまつた。

「はてはて、これあ困つたもんだ。地蔵さまさ上げんなね団子落したんでは、うまくない」

と思つて、団子さ追かけて行つた。ずうつと追いかけて行つた。ほして今度は

んちゃこわいから（つかれたから）、

「団子どの、団子どの、待つてでけろ、どこまでござる」

ほしたれば、ずうっと団子行つたけあ、ちっちゃこい孔の中さ、ひよろいっと入つてしまつた。ねずみ穴みたいなどこさ。したけあ、そこさばんちやもこそこそと入つて行つた。ほしていたれば、広い原っぱあつけ。

「いやいや、あだな狭いところから来たれば、すばらしい原っぱあるつだ、こりや。どっちゃ行つたべ」

と思つて、

「おお、団子どの、団子どの」

したれば、団子どのはまだ、コロコロ、コロコロとばんちやば待つていながら転ころがて行いんけ。ほして団子さ追つかけて行つたれば、万年堂みたいなあつて、ほつからつうと先さ行つたれば、お堂あつて、そこに地藏さま立つていだつけ。

「はあ、ここさも地藏さま立つてござつた。何だか、おら方の地藏さまとよくよく似てる地藏さまだ。地藏さま、地藏さま」

どこの地蔵さまだつて同じだと思つて言うた。

「地蔵さま、地蔵さま。地蔵さまさお上げすつだいと思つて団子搗きしつたれば、手からちよろつと団子こぼつて、団子さ追かけて来たんだげんども、ここらで見失つてしまつたはあ。地蔵さま、不調法だげんど、はいつ見ねがつたべがつす」
て言うたらば、

「ばんちや、ばんちや、おれあ今御馳走なつてしまつた。いや大變うまい団子だつた」

「地蔵さま、ほだごど言うても、ええ米も取んねで、悪^われ米だつたから、うまいわけなのなかつたべげんど、おらえでの一番ええ米で搗いた団子だつたず、まず」
「ああ、ええ、分つた分つた。時になあ、ばんちや。ちよえつとおれの膝さ上^{うへ}が
れ」

「なんだ地蔵さま、地蔵さま、拝むことこそすれ、膝さなの上がらんねつたな、もつたいなくて」

「いやいや、上^{うへ}がれ、上^{うへ}がれ。おれの命令だからな」

「んだら仕方ないっだな。地蔵さま、ごめんしてけらっしゃい、ああ、どっこいしょ」

「ええか、ばんちゃ、ばんちゃ、こんど肩さ上がれ」

「肩さなて上がらんねっだな。膝さ上がらんねんだも」

「ええから上がれ、ええから上がれ」

「ほんじゃ、よっこいしょ」

肩さ上がった。

「ばんちゃ、ばんちゃ、頭のとっぺんさ上がれ」

「なんだまず、地蔵さま、ほだな頭のとっぺんさなて、おれ上がらんねっだなす」

「ええから、上がれ」

て言うて頭のとっぺんさ上がったれば、上は何だか頭のとっぺんみたいでなくて、ちゃんと坐っている。ええどこあるんだけど。

ほだいているうちはあ、いつかの小間こまに暗くなって、鬼集まってきたんだど。

「何だか人くさいようだね」

「人の匂いするなあ、んだげんどもこの地蔵が原、おら方の原っぱだから、人なの来るわけないもなあ。あだちい小つちやこい穴もぐつてくるわけないもなあ」

「んだずねえ」

「どうだ、そろそろ始めつかい」

て言うたけあ、ジャラジャラと銭出して、丁半の博奕打ちはじめた。したけあ、地蔵さま、小声で囁いだんだど。

「ばんちや、ばんちや、ええか、おれちよつと一ぺん突ついたら、コケコッコウて鶏の真似するんだ。二度突ついたら二回鳴くんだぞ。三度突ついたら、三度鳴け」

こういう風に言うた。して、ちようど丑三頃になったれば、地蔵さま、ばんちやばちよえつと突ついだ。ばんちや、ほれ、地蔵さまから命令さつだもんだから、絶対服従だ。コケコッコウて言うた。ほうしたれば鬼だ、博奕打ちばたつとやめて、

「おお、今日は早いな、一番鶏あ。んだげんど二番鶏まで一刻いっときほどあつからな」

一刻ていうのは今の二時間、何、まもなくはあ、一時間もおもったら、こんどは二番鶏、「コケコッコー、コケコッコー」て、二度やった。

「やあ、二番鶏鳴いた、ほんではまず、いそげ」

そしてまた博奕始まった。丁半、丁半で始まった。ほしたらば、間髪を入れず地蔵さま突つついだ。ばんちゃ本気なつて、「コケコッコー、コケコッコー、コケコッコー、トトコノクー」て、三べん鳴いだらば、

「三番鶏だ、他の人來つどなんねえから、んじや、んじや（行こう、行こう）」
て、みな錢ぶち投げて行つてしまった。ほうすつど地蔵さま、

「ばんちゃ、ばんちゃ、実はな、お前から御馳走になつてだ地蔵さまも、おれも同じもんだ。とぼしい中からも、毎年毎年団子こしやえで上げてもらった。忘せらんねんだ。んだからこき鬼ども置いて行つた。錢、ろくだなことしてとつた錢でないから、おれあ巻き上げてやつたんだ。結局、かいつ、家さもつて行つて、じんつあとばんちゃと仲よく暮らせな」

「んだげんど、地蔵さま、あだな狭っこい道狭っこい穴んどこ、こだい錢もつて

行かんねべした。つうとでええっだな」

「いやいや、お前、欲ないこと、ほだごと言わねで、ええか、おれ、今、まじないして呉^けっから目つぶれ。ええか、ほら、目開いてみる」

パツと目あいでみたら、自分の家どこさ投げ出さつていだんだけどはあ。ほして、「じんつあ、じんつあ」

じんつあ、まだ臼んどこさ、ばんちやいねぐなつたし、団子、なぜしたらええかと思つてうろうろていだけど。

一晚過ごしてきたような氣してきたげんど、大した時間経つていねんだけど。ほして銭いっぱいもらつて、二人は、よく後あとまで暮したんだけど。どんぴんからりん、すっからりん。

158 狐むかし

むかしとんとんあつたずま。

あるところへ、山菜とつて町ちや売り行ったり、あるいは茸とつて売り行ったり、雑魚せめて売りに行ったり、ほして売ってきた錢で、ばんちやと細々暮してゐるじんつあいだんだけど。ほしてある時、年とりにもなったもんだから、山菜の干した奴、ゼンマイとかコゴミ、そういう風な背負つて、じんつあ、また町さ売りに行つた。

ほして、ええあんばいに売つて戻つてきて、いつでも町はずれの酒屋さ寄つて一杯ひっかけた元氣つけて帰つて来んのだけど。

ところがじんつあ、山菜乾したな売つて帰つて来んべと思つたれば、きれいな女おんな、「じんつあん、じんつあん」て言うた。「何だ」「おまえ、ほだえして大變だべがら、おれ、お前さ行つて手伝うからて、おれば連せて行つてけらしやい」
て言う女いだんだけど。

「ああ、ほうか」

じんつあ、はいつ見っだれば、むらむらと女欲しくなつたんだど。

「ほうか、んだらば、おれとお前連れ立ってあ行つてあ目立つから、この箱さ入んねが」

て言うて、大きい箱背負つて、昔はまゆ箱で言うて、もともとはお茶などつめてよこした奴を、蚕のまゆつめたもんだそうだ。はいつさいろいろなものつめて背負つてつて売った。ほのまゆ箱の中さその若い姉ちゃんば入つて背負つてきた。ほして酒屋さきて一杯ひっかけて元氣つけて行くべと思つて、酒屋さ入った。何だかいつかと様子ちがう。ソワソワしてる。ほして、

「やあ、親父さん、一杯たのむ」

て、いつもの通り濁酒ひっかけたところが、番頭だ、

「何だてあのおかしいな、普通とちがう、何背負つてきたんだべ、あのじんつあ」
て言うわけで、そおつとその箱のふた開けて見たんだど。したれば、はいつの中から狐がピョーンととんで行つてしまつたんだど。

「あややや、悪れ^わごとした、じんつあ、せめて来た狐、こりや逃がしてしまった。こりや、なぜしたらええがんべ」

て思つて、番頭だ考えた。

「ああ、ええことある。仕方ない、はいつちや酒粕入つて置けはあ」

て言うわけで、狐の重さぐらい、ちょうど四・五貫目ぐらいの酒粕箱の中さ入つた。ほうしたれば、じんつあ一杯飲んで機嫌ええぐなつて、

「ああ、姉ちゃん、姉ちゃん、んじや、まず、おら家の家さ、んじや（行こう）」
て言うわけで、ニコニコで荷繩^{にな}首さ首通して、荷繩で背負^えつてきた。ほうして家さ来つど、ばんちや要^いらねぐなつたはあ。若い姉ちゃん連^せてきたから、

「ばさま、んだから、皺くちやばんば出はつて行げ」

「何だべ、いつもこだごど何十年とつれ添^ゆつてだげんど、言^ゆつたことない。何気に合^あわねくて、ほだごど言う。じんつあ、じんつあ、おれの何か気に合^あわねどこあつたら…」

「やかましい、ヘラヘラ言うな。にさ（お前）なの、どこもかこ気に合^あわね、

口などばりへらへらって」

「ほどごないべした」

「出はって行げ、出はって行げ」

何^{なえ}ったて、出はって行げ、出はって行げて言うもんだから、ばんちゃ仕方なくて出はって^{なえ}はあ、そおと、隙^{さま}の孔^{さま}から見^{なえ}つた。ほうしたれば、

「ああ、姉ちゃん、うるさいばんば出はって行^{なえ}つた。おれと二人して今日から暮すべ」

なて言うわけで、ほのふた、ちよえつと取^{なえ}つて見たれば、姉ちゃんがいなくて、酒粕入^{なえ}つてだけど。したれば、じんつあ、

「こりや、ばんちや追出^{なえ}して、おえない目に会^{なえ}つた」

ほだい遠^とくまで行^{なえ}かねべと思^{なえ}つて、表の戸あけて、がらがら這^{なえ}つて行^{なえ}つて、

「ばんちや、ばんちや、酒粕なめろ」

て言うて、そしてばんちやは連^{なえ}れもどしたけど。どんぴんからりん、すっからりん。

159 笠 地 蔵

むかしとんとんあつたずま。

あるところに、じんつあとばんちや二人いだんだけど。ほして焚物売ったり、柴売ったり、あるいは山菜・茸・雑魚なの、捕^せめて売ったり、町さ背負ってくるじんつあいだんだけど。

ほして、そのじんつあ、いつも背負って行く柴、みんなから人気ものなんだけど。「すずめ柴」て言うて、くべつどチュウチュウというから、「すずめ柴」ていうのだど。なしてチュウチュウて言うかていうど、他の人背負って行く柴は乾燥した柴で燃えつけんども、そのじんつあん、なかなか生活楽でないもんだから、伐ってきた柴すぐ売らんね。乾燥してねもんだから、チュウチュウて音する。んだげんど正直なじんつあだし、なかなか年もとつてるし、気の毒がつて、柴よく買^けつて呉^けだもんだど。

て、ある時、正月もそろそろ近づいたから、毎年買つて呉た人さ配らんねべ

て、正月のお雑煮用として取ってだ（干しぜんまい）背負って、そいつ売って正月する米・味噌・魚で買ってくるという計画で行なった。ほしたらその日は、何だか空模様悪れて、みぞれ降ってきた。ほして村はずれまで行ってみれば、村はずれの七地藏で言うて、七人の地藏さまが、そのみぞれに叩がって、いかにも寒そうだった。

「ああ、地藏さま、寒そうにしまったのだ」

と思ったげんども、銭一文もない。何とかまず、こいつ売ってと言うわけで、町さ山菜背負って行ったら、いつもの通り買う人待ってで呉^けではあ、みな買ってもらった。ところがはいつで正月のもの買ってくつどええがったげんど、地藏さま寒いがんべて思^けって、クゴ蓑と菅笠と、おのおの七つ買ってきて、そして地藏さまさかぶせて呉^けだ。

「地藏さま、地藏さま、寒いがったべな、ほらこんどは大丈夫だ。ほら、こつちもどっこいしょ」

て、七人の地藏さまさ、みなかぶせて呉^けだ。ほして家さ来て、

「ばんちゃ、ばんちゃ、実はこういうわけで、銭、これだけもらったんだげんど、ほいつでクゴ蓑と菅笠と買ってきて、地藏さまをかぶせて来たはあ」

「ああ、じんつあ、ええがった。何ほだえうまいもの食ねったて、正月なの来んのだから大丈夫。んでは今夜仕方ないから、クキナ漬でお湯でも飲んで寝んべはあ」

て、二人は菜漬け出して、お湯飲んであ、寝たんだどはあ。ほうしたれば明け方になったれば、表、急にさわがしくなった。

「何だべ、何ごと始まったべ」

したれば、こう言う声聞こえる。

「ほこらでないかい、じんつあ、ばんちゃ」

「こころな答^{はん}だ」

なて言うけずあ、表の戸ドンドン叩く音した。ドンドン叩く。

「はいはい」

したれば、一等最初かぶせて呉た地藏さま先頭になって来て、

「いやいや、じんつあ、実はおらだ、村はずれの七地藏だ」

ほうしたけあ、七人して米俵、ほれから鮭のよ、ほら着物だの何だのって、いっぱい車さつけて引張ってきた。ほして、

「こいつあ、おらだからのささやかながら、じんつあとばんちやさの贈り物だ」
ほしてドサツと、はいつ置いて行っただけどはあ、クキナしか食わんねがったじんつあとばんちや、急に地藏さまから、いっばいもらって、ほして楽々とそいつ御馳走なりながら暮したけど。どんぴんからりん、すっからりん。

160 金の斧と銀の斧

むかしとんとんあったずま。

あるところにじんつあとばんちやいだけずま。じんつあ山さ行って、毎日木伐り、ばんちやは家守って細々と暮しただけ。ほしてあるとき、沼のほとりで、

じんつあ斧研いでだれば、ツルツと手ひっぱずして、斧中さ入って行ってしまった。

「はてさて、困ったことになったもんだ。斧ないげば、おれ、明日から暮さんね。何とかなんねべか」

と、いろいろ手でさぐったり、何かえして見ても分らね。ほうしたれば、何だかおかしげな人現わっただけあ、

「かいつ、お前な、んねが」

て、斧持ってきた。はいつ見っただけあ、じんつあ、

「こだな立派な斧でない、おれのは何十年も使ったんだから、よくよく減った斧だ」

「ほうか」

て、そいつはスウーッと消えたけあ、また別な斧持ってきた。

「ほんでは、こいつだか」

見たれば、ほいつあ金の斧だった。

「いやいや、金の斧でない、おれあ貧乏してんだから、鉄の斧の、よくよく擦り減ったんだ」

て言うたれば、

「いやいや、実はな、おれはこの水神さまだ。お前が正直なために、おれは、この金の斧、お前さ授けてやつから、こいつ持つて行つて、こいつ売つて、木こりなどすねで、ゆうゆうとばんちやと暮したいから、こいつ持つて行つて暮せはあ」

て言うて、水神さまから、その金の斧もらつたげど。んだから正直してつど、ええごどあるもんだて、むかしから言うたもんだど。どんぴんからりん、すつかりりん。

161 長い名の子

むかしむかし、ある村き、おぼこ生まっだずま。ほしてそのおぼこの名前、何てなえ付けたらええがんべと思つて、ほしてお寺さまさ、

「お寺さま、お寺さま、おらえの家さおぼこ生まっだから、名前つけてけらっしい」

「うん、おぼこ生まっだて、男かな、女かな」

「男でございます」

「うん、そうか、ちよつと待つてろ」

て言うて、お寺さま、お経の本出した。

「うん、ジュゲム・ゴコウ・カイジャリ・ウンライ・フウライ…」

ずうつと書いてみた。はいつ見っだけあ、名前つけてもらいに行つたおつつあ
んが、

「お寺さま、お寺さま、ほだえ、ええ名前ならば、皆つけて何たべなんつす」

て言うたら、

「ほうか、んじや、今から読んでみんぞ、ジュゲムジュゲム、ゴコウノスリキレ、カイジャリ、スイギヨノスイギヨウマツ、ウンライマツ、フウライマツ、クウネルトコロニスムトコロ、ヤブラコウジノブラコウジ、パイポパイポノシュウリンガン、シュウリンガンノグウリンダイ、ポンポコナノポンポコピノチョウキウメイノ、チョウスケ」

「はあ、ええ名前だ、はいつ、みなもらって行くぜはあ」
ほして家さがらから走って、

「かあちゃん、かあちゃん、お寺さまに名前つけてもらってきた」

「はあ、何ていう名前、長いべか短いべか」

「ああ、つうと長い」

「何てつけてもらって来た、まず」

「ええか、今から読んでみっから。ジュゲムジュゲム、ゴコウノスリキレ、カイジャリ、スイギヨノスイギヨウマツ、ウンライマツ、フウライマツ、クウネルト

コロニスムトコロ、ヤブラコウジノブラコウジ、パイポパイポノシュウリンガン、シュウリンガンノグウリンダイ、ポンポコナノポンポコピノチョウキュウメイノ、チョウスケさんて、名付けてもらって来たんだ。ナマンドブ、ナマンドブ」

「何だかお経みたいだ、おら」

「お経みたいだって、お経からつけてもらって来たんだ」

「んだがした」

なて。ほだえしているうち、だんだん大きくなってきてはあ、手習いさ行かなねようになった。ほうすつどジュゲムがなかなか寝ぼすけだ。友だちあ起しに五十軒も手前から呼ばって行かねど、ほこの家さ行ったとき、タイミングうまく合わね。

「ジュゲムジュゲム、ゴコウノスリキレ、カイジャリ、スイギヨノスイギヨウマツ、ウンライマツ、フウライマツ、クウネルトコロニスムトコロ、ヤブラコウジノブラコウジ、パイポパイポノシュウリンガン、シュウリンガンノグウリンダイ、ポンポコナノポンポコピノチョウキュウメイノ、チョウスケさん」

五十軒も手前から呼ばって行かねど、なかなかええあんばいになんね。んだととてもジュゲムざあ寝ぼすけで起き上がんね。ほうすつどまた呼ばんなね。ジュゲムのおかちやんつあ、つうと耳聞こえねがつたど。んだもんだから、もさつとしてる。おつつあんが稼ぎに行ってる。ジュゲムは寝ぼすけだべし、なかなか起きない。ほうすつど寺子屋へ遅れっどなんねから、

「ジュゲムジュゲム、ゴコウノスリキレ、カイジャリ、スイギヨノスイギヨウマツ、ウンライマツ、フウライマツ、クウネルトコロニスムトコロ、ヤブラコウジノブラコウジ、パイポパイポノシュウリンガン、シュウリンガンノグウリンダイ、ポンポコナノポンポコピノチョウキウメイノ、チョウスケ、起きろ」

やつと「おお」なて起きてきて、学校さ行くのだけど。

ところが、ジュゲムは喧嘩好きで、寺子屋さ行っても、いつでも喧嘩する。寺子屋の先生からごしやがつでばりいる。

ある時、友だちの頭、いやて言うほど引っぱだいだ。すばらしい大きいコブ出てしまった。ほして家さ行ったらば、そこの家のかあちゃんが、

「何した、こだい大きいコブ出した」

「十人前叩がった」

「んだら、おれ行つて、つけ込んで来らんね、おえねえ（いけない）野郎だ」
　　こういうわけで、その友だちのおかちやんがジュゲムの家さつけ込み来た。

「お前の家のジュゲムジュゲム、ゴコウノスリキレ、カイジャリ、スイギヨノスイギヨウマツ、ウンライマツ、フウライマツ、クウネルトコロニスムトコロ、ヤブラコウジノブラコウジ、パイポパイポノシュウリンガン、シュウリンガンノチョウキウメイノ、チョウスケがおら家の野郎の頭叩いてコブ出した」

あんまりせき込んで言うたもんだから、何が何だか分らね。ほいっっちゃジュゲムのおかちやんがキンカ（聾）ときてる。「何？」て聞き返す。ほうすつど、

「ジュゲムジュゲム、ゴコウノスリキレ、カイジャリ、スイギヨノスイギヨウマツ、ウンライマツ、フウライマツ、クウネルトコロニスムトコロ、ヤブラコウジノブラコウジ、パイポパイポノシュウリンガン、シュウリンガンノチョウキウメイノ、チョウスケが、おらえの野郎の頭叩いて、こだい大きなコブ出した」

「何、どれどれ、コブ、ああ、何もないど、これ。嘘ばっかり言ってる」

なて、あんまり名前長いから、ジュゲムのかあちゃんが頭撫でてみたときは、コブないんだけどはあ。

ところがある日、みんなして遊んでいたとき、何したもんだか、ジュゲムが足滑らかして川さ落っでしまった。春先の水どんどん流れっどきで、増水したときなもんだから、ツプツプ流され始めた。はいつ見っだ友だちは教えきた。

「ジュゲムジュゲム、ゴコウノスリキレ、カイジャリ、スイギヨノスイギヨウマツ、ウンライマツ、フウライマツ、クウネルトコロニスムトコロ、ヤブラコウジノブラコウジ、パイポパイポノシュウリンガン、シュウリンガンノチョウキユウメイノ、チョウスケさんが川さ入った」

ところが、おかちやんがキンカなもんだから、「何？」て聞き返した。もう一ぺん言った。ほだいしているうちに、ツプツプ流っで行って死んでしまったけどはあ。んだからあんまり長い名前ざあ、つけるもんでないけど。どんびんからりん、すっからりん。

162 日 吉 丸

むかしむかし、百姓家あつて、そこのかあちゃんが腹大きくなつたげんども、二年たつても三年たつても、おぼこ生まんねんだど。

「へえ、不思議なこともあるもんだ」

と思つていたところが、三年三月たつたれば、申年生まれの酉の刻に、おぼこ生まつだんだど。ところが、はいつあ申年生まつだからだか何だか、まず見るからに猿こと同じ、山のおんつあまと同じなんだけど。ほして名前を日吉丸とつけた。

ところが、その日吉丸がなかなか才智にたけていた。小さいときから別だった。いや、きかねこともおびただし。

「ほだな、とつても家さ置かんねから、お寺さまの弟子にすんなね」

て言うわけで、日吉丸のおつつあんがお寺さまさお願いした。

「こういうわけで、日吉丸、何とかして弟子にしてみraitたい」

「おお、よしよし、ほうか、んだらおれんどこさ連れてござっしやい、どのぐら
い育おがったか、おれも一ぺん見つか」

「んでは一つ」

て言うわけで、お寺さま行つてみた。ところが背は小ちつちやい、顔は赤いくて
しなびたような顔してる。まるでお猿さんとそっくりだ。

「おお、よく似てるな」

思わず言つた。ほうしたら日吉丸も言う。

「ああ、お前も似てる」

「わしは何に似てるかな」

「沢庵漬の乾したみたい、しなびてはあ、よく沢庵漬に似てる」

「こらこら、ほだなこと言うもんでない」

「いや、かまわん、かまわん。んじゃ明日わしんどこへ連れて来い」

こういう風に言つて和尚さん、帰つて行つた。ほして、

「ほら、日吉丸。お寺さ行かなね」

明日になって、日吉丸、

「やめた」

「なしてだ」

「六つ七つなって、お寺さまさ行くに、誰か案内者いねど行かんねなて、世間の
人に言われつど悪れから、やめた」

「んでは、おつつあんが後で行んから」

「いや、やめた」

「なして」

「六つ七つになって、送ってもらわねど行かんねて世間から言れつど、なんねえ
から行かね」

何はその通り。

次の日になって、朝げ、和尚さん、おつとめした。ほうして日吉丸さ、

「お灯り、消してこい」
「はい」

片っ端からプップツ、プップツて消して行つた。

「これこれ日吉丸、口にはもろもろの不浄がある。なしてそこに団扇があるので、しめさないか（消さないか）」

ところが売り言葉に買い言葉、

「和尚さん、和尚さん、今朝何でお経あげた」

「口であげた」

「なんで、団扇でお経上げね。口にはもろもろの不浄がある」

何はこの通り、変な野郎は来あがつたもんだと思って、和尚さんも困つてだ。んで和尚さんが、あるとき遠くに法事さ招ばつて行がんなねがつた。

「あだな野郎べら居つど、何すつか分かんねから、つうとやかましく言つて行かんなね」

と思つて、

「ええか、ええか、お前だ、ここにある湯呑み、これは唐国からから渡つて来たもんで、見つど目つぶれる。これは絶対に出したり見たりしてはなんね。ほれから庭にあるリングは食うど腹痛つだくなつて、たちまち死んでしまう。ええか、しか

と申付けたぞ。これは絶対食ってはいかん、あっちの方は見てはならんぞ。ええか、これから法事さ招ばっで行ってくっからな、その間しっかり留守しているんだぞ、ええか分かったか」

んだげんど、日吉丸は考えた。

「目つぶれる、ほだえすばらしいもの見てみっだくて仕様ない。片方の目で見たら片方残る。よし、うまいことある。んだら片っ方の目で見てけんね」

て言うわけで、そおと和尚さん行ってから、湯呑み出してきた。ほして、聞くどころによれば、呑めば甘露の味がする、水飲んでも甘い味あまじがする不思議な湯呑みだつていう話は、かねがね昔から聞いた。ようし、見てから水飲んで、ほれからいろいろ和尚さん居ねうちしてみんべと思つて、右の目いたましいから、左の目というわけで、そおと見たれば、ツカポカもしない。何ともない。

「なんだ、何ともないなんて、どれどれ、んだらまず、一つ水汲んで飲んでみっかな」

水飲んでみても、水は水、何ともない。

「なんだ、あの和尚、嘘つき和尚だ。かつじえげだな普通の湯呑みと変らない」
て言うわけで、表さ持つて行つて、石さ叩きつけてしまった。ほして和尚さまに習つたお経上げた。

「ここに、うやうやしくおもんみれば、シンキゲン、唐国にて練り作られ、カマに入れられて湯呑みとなる。海を渡り来たりて、山門に入るなん。今日、ここに日吉丸の手によつて、元の土に帰る。ろう！」

さあ、湯呑み、ぼっこしてしまつたど。そこまではええが、今度は困つた。

「ははあ、仕方ない。リングだつて嘘にきまつてる」

食うど死ぬて言うたリング、今度、登つて一つ食つてみた。何、腹痛つだくなど、なるばりしない。うまいばりだ。次々と五つ六つやつつけてしまった。ほこさ和尚さま歸つてきた。

「こらこら、大人しくしておつたか」

何と、後生大事としまつて置いたその湯呑み飲めば、甘露の味がする、明から渡つてきたその湯呑みは、粉々。リングは半分もやつつけらつた。この野郎ほに

て、ほこさ居らんねぐなつて、山門を追わつてしまつた。

ほして、莫^こ薩^ざ着て、トコトコ出はつて行つた。ほしたら橋のたもとまで行つたらば、占師がいだつて。そこさ行つて、非常に茶目氣のある日吉丸だったから、

「おいおい、占師。どこの誰でなんぼになつたか分つか。当ててみる」

「よし、こつち来い。何郡何村、日吉丸、当年とつて十三才」

「はあ、うまく当るもんだねえ」

「小僧、小僧、莫^こ薩^ざさ書かつたんでないか」

莫^こ薩^ざ読まつてだ。

「はあ、ほのぐらいだらば、おれの運命、手相見てける」

「よしよし、どれ」

て言うわけで手相を見た。それから筮^{せん}竹^{ちく}を。パチパチ二・三回やつただけあ、筮竹^{せんちく}ぶん投げた。

「いやいや、今日限り、おれは八卦おきやめた」

「なしてだ」

「いや、お前みたいな猿みたいな顔だった小せがれが、日本の親方になる。将軍さまになるなんて出からじゃあ、とてもじゃないげんども、おれの占いもはあ、わかんない。まず右手には天下筋、これあれば天下をとるには、決まっていることになっているんだ。お前みたいな天下をとるのであれば、とてもじゃないげんども、そだな商売していらんね」

「いやいや、八卦おき、そう言うたもんでない。おれだって天下取らねって限らない。もし天下とつたら、お前ば大名にすつから、しかと憶えておけ」

て言うど、ドンドン、ドンドン、そつから下つて行つたわけだ。ほして何の風の吹き廻しか、いつももなく織田信長の草履とりになつてだ。

これはまた一生けんめい働くもんだから、みんなから日吉丸、日吉丸で言わつていた。ところがある日、織田信長が草履はいてみたれば、温かかった。

「無礼者、その草履に尻かけていたな」

非常にお叱りあつた。ところが、

「いや、上さま、ちがいます。ここ見て下さい」

て、胸あけて出したれば、その胸に草履の跡二つあったので、

「ああ、お前はすばらしい」

て言うわけで、それからまた認めらつて、取り立てらつて、今度は足軽になつた。名も藤吉郎と改めた。ほしたらあるとき、江戸一番の美女のねねの方、江戸一番の美男の加賀の犬千代。これは誰言うことなく二人は一緒になるだろうと、こういうこと世間の噂できまっていたみたいなもんだ。ところがねねの方のお父さんと加賀百万石の犬千代のお父さんが婚約してしまった。そしていよいよもつてムカサリの日取りということになったところが、ねねの方、

「わたくしは嫌でございます」

て、さめざめと泣いて何とも行こうとしない。そして娘はあんまり氣進まねという。

「何と、無礼な事申すな、人に恥かかせるもんじゃない」

加賀の殿さま、烈火のごとく怒つて、

「そういうことだったらば、刃やいばの上でも、もらつて見せるぞ」

何とも仕様ない。ところが、

「ほとほと困ってしまった。何とか工面ないべかな」

ていたところが、

「猿め、ありやなかなか、頓智がええから、智恵借りることにしよう」

と、こういうわけで、足輕の藤吉郎招ばった。

「いや、実は家のねねが何とも行かねて言うんだ。何とかお前、ことわる手立てないもんだか」

相談した。ところが藤吉郎、平然として、

「いや、あります」

「ほんじゃ、お前行って、ことわって来て呉けつか」

「行って参ります」

引き受けて行つた。ところが相手は加賀百万石、なぜ言うて行つたらええかと思つて、藤吉郎、ほとほと困つた。んで一策を案じてのり込んだ。

「犬千代さま、ねねの方、おあきらめ下さい」

「どういふわけだ」

「いや、ねねの方、あなたと結婚さんね」

「結婚さんねて、どういふ理由だ。理由を聞かせてもらいたい」

まさか、そこまで来つと思わねし、藤吉郎もほとほと困った。それで窮余の一策で、

「婚約者がございます」「婚約者は誰だ」

他人のこと言うては何とも仕様ないもんだから、藤吉郎が、

「わたくし奴めにござります」

て言うたら、犬千代はカンラカラカラと笑つて、

「そうか、それでは、それがしが仲人をつとめよう」

「はい、お願いします」

ては言つたものの、これは困った。

また加賀の犬千代も猿芝居やつてるんだと。とんでもない。三日もおもつたらそれこそ箒逆さに立てらつていんべはあと思つてだ。そして一応その場は切り抜

けた。

「どうであつた。藤吉郎」

ねねの方のお父さんは待つてだ。

「いやいや、こういうわけで、ことわつてきた」

「はあ、それはよかつた」

「んで、その、どういう風にしてことわつてきた」

「実は、こうこう言うわけで婚約者がいた。その婚約者は、誰だて言わつて、わたくし奴でござりまするまでは、ええがつたげんども、それがしが仲人するつて言わつて、これには参りました」

ところが、親父はまたぶつ魂消た。いや早くよりもつと状況悪れぐなつた。んでは困つたことになつた。仕方ないて言うわけで、ねねの方に聞いた。ところが、「わたくしは行きます」て言わつて、二度魂消た。不思議なこと、あだな猿さどこええくて行くなだべと思つたらば、ねねの方がある日、占師さ行つたら、

「お前には何時いつの何日いつかに縁談がある。その人と結婚すれば、お前は破滅だ。今日

から数えて百日目に縁談ある人と結婚すれば、お前は天下をとる」

て言う卦が出た。それが丁度、犬千代から縁談あったのが何日目、数えて百日目が藤吉郎であつた。ほしてめでたく二人が結婚した。御祝儀の日取りも決つて加賀百万石の媒酌で、高砂やも高らかに結婚式もとどこおりなく終つた。二・三日おもつたら、尻ばじきさつで、何とも仕様なくていつかど思つて、犬千代が忍んできて、垣根のかげからそつと見たれば、何と仲のええごど、ねねの方に膝枕して、ねねの方が藤吉郎の耳かすなどを取つて呉^けつた。

「いやいや、世の中、不思議なこともあるもんだ」

なて、めでたく二人がそこで結ばれ、一生送つたわけだ。どんびんからりん、すっからりん。

むかしむかし、春先、味噌煮つどて、臼さ味噌煮豆入つで、臼で搗いたやつをハギリで、塩・糀入つで、豆五合・糀五合・塩五合で、五合ごごう混ぜた。ところが搗くべと思ったところが、用ある人ござつたりして、ほしてさめつどなんていうわけで、席かけて、その上さ藁かけておいた。ところがその用が終んねくて長く続いたもんだから、次の日になってしまった。

搗くべと思ったら何とズルズル、ズルズル糸出てしまった。搗ける状態でなかった。指でとつてそつと食つてみたれば、匂いも悪くないし、何とこれは食んねどころか、腐つたんでなくて、うまいものになっていた。

「何とうまいものになっていた。何とうまいもんだ」というわけで、「なんと」て言うたげんど、だんだん「納豆」になったど。どんぴんからりん、すつからりん。

加藤清正の朝鮮征伐した。ほんどき、食糧難におそわつて、海上では日本の水軍が負けた。陸上では非常に活躍したげんども、海上封鎖さつたため、日本からの補給が続かねがった。ほして朝鮮の現地から取上げたところの豆でもつて、豆を煮て、弁当にして持つて歩った。

そして春先、その汁がしたたるもんだから、藁のツトコき入つて、そして背負つて歩ったところが一日背負つて歩ったときには、ほだんでなかつたげんど、二日目になつたれば、何だか、かぶつたようにおかしげになつた。

「こりや腐つだから食んね」

「いや、こだいっぱいのもの投げるのもおしい」

て言うわけで、ある人がそつと指つつ込んで食つてみたれば、

「いや、こりや何とうまいもんだ」

なんとうまい、なんとうまいと言うの、いつの間に訛つて「納豆」になつてし

まった。どんぴんからりん、すっからりん。

165 疫 病 神

豊田村、岡のはなし。

岡野久左衛門という人の先祖が、朝草刈りに行った。朝暗いうち。そしたれば
菰着った乞食^{ほいと}みたいな居た。

「おいおい、おればのせて、行^いんじやい」

「お前、誰だ」

て言うたれば、

「おれあ、疫病神だ」

「いやいや、とんでもない。疫病神なの、のせらんね」

「いや、ほでない、おれあ金もうけ教えっからのせろ」

金もうけと聞いて、金でばりみんな苦勞してるもんだから。その人は非常に奇抜だった。

「んだら、疫病の神さま、おれの馬さのらはれ、金もうけ教えて呉っこんだら、草刈りなのしてらんね」

鎌ぶつ投げて疫病の神のせた。

「さあ、のらはれ」

て、くつわとつて馬さはんばがった。「どっこい」と疫病神さまのつた。パツカパツカ引つ張つてきた。ほして部落まできて、

「ここで降りして呉ろはあ」

「はい、さあ神さま、ここで降りなはれ、どっこい」

て降ろした。ほいつが姿見えねがったて言うなだな。本当んどこは。

ところが一日二日おもつたれば、ほつつでも熱あ出た、こつつでは頭せんいたい、うんうん、うんうんてうなる患者がいっぱい出た。んだもんだから、先には医者なてあんまり發達していねもんだから、おなかま（巫女）さ行つて聞いた。

「久左衛門の馬さのせてもらつて、ほして村はずれさ捨ててもらうど、熱はたちまちさめる。今流行はやつてゐる病気は、疫病の神だ」

はいつ聞いた人が頼みに來たて言うわけで、

「ほうか、ほうか、んでは疫病の神、おれあのせて呉る」

て、その家の前さ行つて、馬のくつわとつて、

「さあ、お神さま、のらはれ、どっこい」

て、声かけて、パッカパッカ、パッカパッカで引つ張つてくつど、ほの病人がスウィツと熱あひける。体、涼風が通るようになってきた。さあ今度、その話でもちきりだ。そつちからもこつちからも頼みにくる。頼みくると同時に、金いらねなて言うたて、

「いや、おかげさまで生命助けてもらった」

どんどん、どんどん錢置いて行つた。ところがほの村全部きまつたと思つたれば、隣の村さ疫病神移つて行つた。その隣村でも、またうんうんていう病人が出て、やっぱり久左衛門さ頼みにくる。ほうすつど久左衛門が馬仕度して、ほして

パカパカ、パカパカて行くど、その家では待ってる。

「久左衛門さん、こっちだつす、あっちだつす」

て、案内して、その家さ真直ぐ連て行つてける。

「ああ、ほうか、んでは疫病の神さま、のらはれ、どっこい」

パカパカ、パカパカ。行つたか行かねうち、熱はすうつと下がる。隣の家でもその隣でも。ほして豊田村岡て言うどこ中心にして、ほこら十ヶ村も疫病の神、みな廻つてしまった。ほうして気付いてみれば、近郷近在にいねほど金残つていたずも。んで、この塩梅ならば、山形まで他人の土地踏まねで行くほど土地買ういはあて言うてだ。

ところが、ほだいしているうち、どういうわけだか一番長男が昔のいうドスになつたらしい。どうも様子が変だ、家さ置いて嫁とつて呉るわけにも行かね。んだから五百両背負わせて、

「お前は善光寺さま、お詣り行げはあ」

本人も自覚して、そういう体なもんだから、

「んでは仕方ないっだな」

て言うわけで、五百両の銭背負ってパカパカ、パカパカとお詣り出かけた。ところが山形のずうっとこっちや来て、黒沢というところまで来たればこわく（疲れ）なって、その坂登られそうでない。早坂登られそうでない。したら道の脇にせつせと草刈りした女いだけど。ほこさ、ほの息子は行つて、

「姉ちゃん、姉ちゃん、草刈り上手だな」

て賞めた。

「ほだんでない」

「実はな、おれ、こういうわけで家出てきたんだげんど、何だか此処まで来たらこわくてなんねえはあ。きつとこりや、おれも余命いくばくだかも知んねえ。おれはこの年になって女で知しやねなだ。実はお前さお願いすっだいことは余のこどでないげんども、今いっぺん、おかちゃん思い出してみっだいから乳首何とかおれさくわえらせてもらわんねべか」

その女さ頼んだ。大がいな者だら、「おら知しやね、おら、ほだな…」て言うげ

ண்டும்、その女は非常に賢い女だったらしい。ほして、

「実は、おれは姉ちゃんでなくて嫁なんだ、黒沢の久左衛門ていうどこさ、おれ、嫁に来たんだ。んだから、父ちゃんと相談してみねど、ほだなことさんねっだな」
て、こうなった。

「んでは、何とかお願いします」

ほして、こうこう、こういうわけだどて、旦那さ語ったれば、

「その人さ、そういう風にさせて上げる」

て。そして、くわえらせだれば、

「ああ、おれはこの世の中にのぞみも何もないはあ、いつ死んでもええはあ」

て言うた。ほして、その家の旦那さま、自分の家のお庭さ、庵建てて呉て、ほこで丁寧たねせんに扱った。そして過ごしたところが、置いて行った金は五百両、その五百両を種銭たねせんにして大きくなったのが黒沢の久左衛門だったど。どんぴんからりん、すっからりん。

ずっとむかし、三百五十年以上も昔、櫓下に三平という人いだったど。

その三平という人は、毎日の仕事は鱒突きしったんだど。三平という人は投げヤスで鱒採るなの名人だったど。冬分は背中でも頭でも投げヤスで当り前とつけんども、夏になってくつど、そういうどこさ刺すど、息が下がるもんだから、エラのどこ刺すがつたど。どこさも傷つけねで刺すがつたど。ところが昔は二・三男対策ていうのがないもんだから、ええどこの舎弟コや何かだと聲にもらうどこや、分家して呉^けつどこあつけんども、普通の家では分家や何かしてけらんねもんだから、はいつは江戸さ出て行かんねがつた。江戸は何人行つても大丈夫だった。ところが、あるどころの槍の道場さ行つてみた。三平から見つど、隙だらけだった。

「ははあ、ほだなごんで人突かれるもんでない。ボーフラて言うもんだ。蚊の兄んにやて言うもんだ」

はいつ聞がった。

「こらこら、聞けば東北なまりだげんど、どっから来た」

「奥羽出羽の国から来ました」

「ん、その槍使えんのが」

「いや、槍使わんねげんど、あだなごんでは人なの刺さんね、ミミズも刺さんね」

「んだらば、試合やってみつか」

「雲助みたいなモサモサしてんでなくて、一番えらい人出してけらしやい」
出たつて、して、二・三合わたりあつた。ほしたら魚のエラさ当てるくらい名人なもんだから、三平の手からヒョーツと放つたと思つたら、その指南番の膝さ当たつた。ガクツと言うけあ、腰逆に曲つてしまった。そしてはあ、そこさぶつ倒つた。

その話聞いっただのは藤吉郎、ほして三平は藤吉郎の槍の指南番になつてしまつた。その当時、織田信長が長い槍、短かい槍のどっちが有利だか、織田信長の指南番しつた人が、

「いや、短かい槍にかなわね」

ところが何きでも反対して、はいつ為しとげる藤吉郎が、

「短かい槍の方がええ」

論判がはじまった。

「んだら、いつの何日^{いつか}長い槍、短かい槍、試合してみんべ」

槍のヤの字も知しやねし、こりや、そいつ始まったとき、困ったもんだて、藤

吉郎さ言うど、藤吉郎は考えた。

「ようし、世の中、地獄の沙汰も金次第で言うた。金で何とかうまく行く方法ないべか」

ほして集めたのが、百姓町人ばり、槍のヤの字も知しやねなばり、短かい槍の方は、ある程度できるな二・三人。ほうして槍の指南番が一番先頭、こっちは藤吉郎が一番先頭、そして藤吉郎は槍持^{たが}った百姓町人さ、

「一人やっど、一両^けずつ呉る」

一両て言えば、盆前も稼がんなね。はいつもらえば大したもんだ。負けてもと

もとだ。突ついだって殺しはしないべからて、屈強な若衆ばり集まつた。いよいよもつて当日が来て、太鼓合図で、さあ試合と、こうなつた。ほうすつどスイツと藤吉郎の前さ立ちふさがつたのは三平だ。敵の指南番さ目がけて槍を投げた。はいつあ、いきなり胸さ當つた。参つたて言うて倒つてしまつた。ほうすつど、恐れをなして逃げ出した。一人やつつけど一両なもんだから、百姓町人は後から突くは、突くは、ひっちゃかめっちゃか、みな突いでしまつた。ほして大勝を博したわけだ。敵の大将やつたのは五両、ほして三平が五両もらつたわけだ。後の人はみな一両ずつもらつた。ところがその槍の指南役した人は斎藤道三のまわし者だつた。はいつが分つて、藤吉郎もすばらしく点数上げたし、三平という人も藤吉郎のおかかえの指南番になつた。どんぴんからりん、すつからりん。

むかしむかし、円山応挙というすばらしい上手な絵描きの人いだけだ。

ところがその円山応挙という人が猪描いたことない。何とか猪描いてみたいと思つて、百姓さ頼んでいたれば、ある朝教えて来た。

「先生、先生、猪いたからそつと行つて描くとええ」

ほして喜んで行つて、まず今の言うデッサンした。ほしてさつさつ、さつさつとスケッチでとつて、家さきて描いてみた。われながらええ塩梅出たと思つておいただれば、狩人のひと遊びにきて、

「なして、先生、死んだ猪描いたんだ」

て聞がつた。

「死んだ猪なて、おれ描いっただ時、生きっただ」

「また、先生、ほだごど、ねつちよ張つたつて分んねつたな、おらだ商売だも」
「商売だて、実はな、このホツていう息見て描いてきたんだから」

「いや、先生、生きつだ猪はこういう格好にならね、死ぬときばりだ、こういう格好するな」

論判になった。

「んだらば行つてみんべ」

こういうわけで、ほの百姓と田山応挙先生は行つたれば、やっぱり猪、手傷負つて死んでいだつけ。んだから狩人の言うこともやっぱり長年の経験で、こういう風な格好しつたときは、この熊はかかるんだ、あるいはこの兎は走るんだ、このキジは飛ぶんだということを十分狩人は心得つだもんだけど。んだからその道その道にかけては狩人と言えども、馬鹿にさんねて言うたもんだけど。どんぴんからりん、すつからりん。

むかしとんとんあつたけど。

藤吉郎もいつしか何奉行でいうて、奉行もいろいろ命じられるぐらいの地位になつていただけ。

ある時、あまた武将集めて、織田信長、課題出した。その課題というものは、築城の課題だった。天下の築城師と言われた明智光秀に、築城の絵図を引かせてこれに文句のあるもの、弱点を見出したものはおらんか、こういう風に言うたれば、

「それがしにございます」

て言うて、いきなり手上げた。

「おお、そうか、藤吉郎、この築城はどこに欠陥があるか」

「いや、殿、一週間お待ち下さい」

「よし、一週間の猶予を与えよう」

て言うわけで、一週間の猶予をあたえらつて、その明智光秀がひいた絵図見たところが、何と何と、それは天下の名人と言われただけあつて、非の打ちどころない。針の刺すほどの隙もない。

「これは困つたもんだ、なぜして悪れぐすれば切腹だ」

こういう風に決心したとき、こういうこと耳にした。

「今はもう浮世を嫌つて山奥さ住んでる竹中半兵衛という大学者がいる。この人がきつと明智光秀の師匠だ」ていう話を聞いて、山奥さ、取るものもとりにあえず尋ねて行つた。ところが、

「浮世を捨てたわしには、そんな人には用はない」

一日・二日・三日も会わね。ところがそこに妹御がおつた。そして毎日毎日同じ時刻に参上するもんだから、その熱意にほださつて、ほして藤吉郎に会つた。そしてこうこう、こうだて言うたところが、

「そうか、それほど言うんだつたらば、最後の奉公ざあ、何だげども、その絵図を見せてもらうべ」て、

「ああ、そうか、なるほどこの築城はよく出来てる。おれはな、たった一つだけは、明智光秀に許さねどこあった。それは何だかと言うと、裏面・側面つよく、正面弱く。どなたも正面はつよいものと思つて、側面・背面から攻撃しかける。ところが、私はたった一つ許さねがったのは、中央に弱点があることだ」

そういうこと教えらつた。そいつ聞いてガラガラ降つて来て、そして織田信長さ、

「この築城は、側面・背面はよいげんども、真正面、中央突破に一番弱くございます」

て言うたらば、

「なるほど、よくやつた」

て、すばらしくお賞めにあづかつた。ほしていよいよもつて太閤秀吉となつて天下をとつてから酒飲むといつでも加藤清正がこういうこと言うがつた。

「殿、剣術やつても学問やつても、何やつても殿はおれの片腕だけないべ。なしておれの片腕もない殿さ仕えていんなだべ」

て、飲むとおどけて言うたそうだ。ところが太閤秀吉は、

「加藤、加藤、まあ、おれとお前は同年同月同刻生まっているんだ。申年の酉刻生まっているんだ。申年生れの酉の刻だげんど、鶏の鳴くどこよつく見ろ、コケコッコーで言うとき、コケツという時が一番頂上で、コッコーで伸ばすときには下だ。おれがコケツというこの頂上で生まっだから天下をとった、お前は三段目くらいだから、おれの家来になってる。んだげんど世の中にはコッコーで伸びたとき、同年同刻生まっでも、乞食してる人もいるんだ、よくよく心せよ」
こう言うこというた。どんぴんからりん、すっからりん。

169 宇都宮の吊天井

むかしとんとんあつたずま。

三百年ほど前に徳川家康の孫に当る竹千代君、鶴千代君という二人の子供がい

た。その竹千代君がどちらかと言えば大器晩成型であつた。弟の鶴千代君は鼻から入って目から抜けるようなきれ者であつた。二人は兄弟同士なもんだから、仲ええげんども、それを取りまく側近同志の仲たがいていうものは、血で血を洗うようなものあつたんだそうだ。ほして何とかして兄竹千代君をなき者にしようと考えたのは、弟君の側近。そしてあるとき、日光に東照宮を建てて、その奥に親君家康公の墓を作つて、そしてそこさ墓詣りという名目で宇都宮というところに吊天井を作つた。吊天井というのは、ロープで天井を吊つてで、そこさお客さま入つてきたとき、そのロープを切り落す。そうすつど、その天井、バーンと落つてきて、その下にいたものをみな殺しにする。またその吊り天井を作つた大工はみな抹殺される。情報もれないようにできると同時に、全部殺されるというのが、言い伝えであつたらしい。

ところである時、その師匠が棟梁が自分の弟子に、まだ年端もいかない、ようやく二十才になったばかりの弟子がいた。ほしてその弟子に言うた。

「お前には十八になるお絹という恋人がいた。われわれはもうこの仕事してから

は、所詮、娑婆さ出て生きて行くわけに行かないんだ。ここにはお堀が廻さつてゐる。このお堀を越えねげば、娑婆さ出らんね仕組になつて、ほしてここで吊天井おらだこしやえらせらつてゐるんだ。これが終ればみんな殺されるんだ。どうだお前、もう二・三日で吊天井完成する。その暁には我々は殺さつてしまふんだ。お前、今夜ここ抜け出して行け。一人ぐらいは何とかなると思う」

そういう風に棟梁が言うて呉^けだ。「はい」て、矢も楯もたまらねくなつて、弟子の若者が寒中お堀を泳いで、向う岸さ行つて、そしてお絹さんの家さ行つて、

「かよう、しかじかだ、もうなかつたものとあきらめてもらいたい」

「帰らねで呉^けろ、おれと一緒になつて呉ろはあ、もうほだんどこさ行かねで、何とかお願いします」

て言うたげんども、その大工の若者は、非常に信義の厚い者だったから、「棟梁だけ殺さんね、おれも一緒に行って死なんなね」

「男同志の契りは生命かけてゐるんだから、師匠はんばっかり殺すわけに行かない。おれは是非とも帰んなねんだ」

て、そして楽しい逢瀬の日もつかのまにして、またお堀を渡って帰って行つた。いよいよもつて完成した。そのあかつきに竹千代君が、その家康公の墓詣りという名目で、供ぞろいして行列組んで、「下に下に」て、宇都宮さのぼつてきた。その時、うら若い一人の女性が竹文と称して、竹に直訴を書いた手紙をその行列にささげた。

「無礼者!!」

て言うわけで、その女が捕つた。ほして、中開けてみたれば、宇都宮の吊天井の一件が克明に記してあつた。

「これはいかん」

て言うわけで、お墓詣りを中止してすぐ江戸にもどつた。ほして事なきを得た。宇都宮の吊天井は不発に終つた。

で、その娘が一たんは無礼者というて取押えらっただげんども、すばらしく後からお賞めになつて、ならばまだ生きているに相違ないと言うわけで、その愛する若者をすぐさま探すように命じて、その大工探してみただげんど、もうすでに後も

片もなかった。して、その責任を感じた弟君の方は、失敗に終わったので、自害して果てた。その竹千代君こそ、後の三代將軍家光公であつたんだど。どんぴんからりん、すつからりん。

170 家光公の禪

むかしとんとんあつたずま。

竹千代君が成人し、こんどは三代將軍家光公となつた。昔將軍さまはお湯さ入つどきは古い禪をぱつと投げてお湯さ入る。そしてお湯から上がつどきは、その新しい禪を目よりも高く差し上げて、上は絶対向かenneがった。そしてその風呂の世話をする女性があつた。そして新しい禪の絹をささげもつて、お湯から上がつどき締める。その殿さまの裸姿なて見らんねがった。

ところがある時、その家光公が、

「これ女性、にょしやう苦しいない、ちよつと顔上げろ」

顔を上げてみれば、とつてもポチャポチャとしてかわいい娘だ。そしてその娘に、將軍さま手出してしまつて、いつとなく腹大きくなつてしまつた。ところが五ヶ月・六ヶ月ともなれば相当目につく、宿下りしなくてはなんね。というわけです宿下り命じらつた。

その宿下りするときに、お墨付と葵の御紋章の入った短刀ともらつて、そして帰るときに、

「ええか、女生まつたら届けるに及ばず、男生まつたら届けよ」

て言うて、品物もらつて宿下りした。ところが家さ帰つたらとんでもない、親父つあんが、

「何だ、どこの誰とほだなことなつてしまつた。御飯おまゐなの食せね。ほだなものあつたもんでない」

非常にごしやがつた。二日我慢しつたげんど、

「おつつあん、おつつあん、おれの体なの、なぜなつてもええげんど、お腹の子

どもは將軍さまの、上さまの子どもだ」

「何馬鹿なこと言う、ほだなこと言うたて、おれはごまかさんね」

「いやいや、ほんでない。ここさちゃんとお墨付と葵の御紋章の入った短刀とある」

「ああ、ほうか」

なんてほんでは娘、でかしたと言うわけで、次の日から煮魚・焼魚・お刺身。

「やあ、將軍さまの子どもでは、これあ、今までのようにしていらんね」

て言うわけでした。んだげんども「女の子生まつたら届けるに及ばず、男の子生まつたら届ける」て言うたげんど、なぜして届けたらええか、こりや困つたもんだ。ているうちに、十月十日の月満ちて、玉のような男の子生まつた。たまたまそこさ一心太助という魚屋が出入りしていた。そのおつつあんは一心太助さ相談した。

「ああ、それあお安い御用だ。おれも親分さ話して通すから、大丈夫だ」

そして一心太助が、かようかようしかじかて言うわけで、大久保彦左衛門に語つ

た。ところが、

「うん、そうか、よし。んだらばええ」

て言うわけで、

「丁度、五月節句のとき、こういう風にしろ。葵の御紋章の小旗立てろ。んだど、余にええ考えがあっから」

て、一心太助さ教えてよこした。ほうすつど、あり金ほとんどはたいて、紺屋さ行つて染めてもらつて、葵の御紋章の入った幟り旗高々と立てた。ほうしたら、大久保彦左衛門、

「上さま、今日は五月節句でございますから、城中から城下を遠眼鏡でござらんになつてはいかがですか。方々にはいろいろな幟りや旗が立って面白うございます」
「そうか、そうだ、遠眼鏡をもて」

「はい」

ほして、二人が物見櫓から遠眼鏡で、江戸の城下町ずうつと眺めて行つた。

「殿、こっちの方がよろう」

「ああ、そうか」

「これ、彦左、城下に余の紋付けた不埒な者がおる」

「どの方面でございますか」

「向うだ。見えるだろう」

「殿、あれは殿の御親戚でございます」

「城下に親戚はない」

「いやいや、こうこう、こういうわけで、風呂番した女は、殿の御親戚」

「いやいや、親戚ではない」

「あそこに、玉のような男の子が生れてございます」

「ああ、そうか」

て言うて、一心太助と大久保彦左衛門の機転によって、風呂焚きの娘の子どもが三代将軍の子どもとして認めらっただけど。どんびんからりん、すっからりん。

171 有村治左衛門

むかしとんとんあつたけずま。

むかしむかし、この江戸でいうところに有村治左衛門という人いだけど。その人が丁度十五才になったとき、おじさんから元服の祝いに刀もらった。治左衛門はうれしくてうれしくて仕方ない。なんぼ名刀でも、切って切れないものは鈍刀だ。無銘の刀でも切って切れるものは名刀だて言うわけで、刀もらうときに、おじさんから、

「決して人を斬ってはならないぞ」

て言うわけでもらったんだが、何となく斬ってみたくて仕様なかった。そしてある晩、辻斬りを計画した。「よし」て言うわけで行った。

ところがなかなか人が通らない。向うから杖ついで来たばんちやがいた。提灯をさげて足どりも安定しないようなばんちやが来た。

「うん、これだ、人生五十年と言うに、この婆さま、格好みれば七十にもなる。

二十年も生を盗んだ不埒な奴だ」

勝手に理屈つけた。理屈つけらった方が大因果だ。

「よし、これ一刀両断」

と思つて斬ろうと思つたら、モンペの尻の紐をとき始めた。何すんなだと思つたら、小便たれはじめた。小便たれでだな斬るわけにも行かぬがら、見っだら小便たれ終つたか終らぬか、パラパラと少しふるえたぐらいにして、腰ごしをしつたら、こんどは、

「一番孫の誰それ、何時どこそこさ嫁もらつて呉^けつど、あさこさ行ぐと仕合せだげんど。二番目、あいつもええ奴だから、あいつ家の大将にして嫁もらつて」

と、大変、孫のこと楽しみにしてる。

「うん、この婆さま、七十になつて、まだ楽しんでる。これは斬るわけに行かね。別な奴にしよう」

て言うわけで、そこからトコトコ行つた。ところが来た。右にふらふら、左にふらふら。

「ははあ、この野郎、酒飲んできずがった。この世知辛い時に、五尺の体、置きどこないほどに酒飲む奴なて、ろくだな奴でないだろう。よし、これ斬るに限る」
て言うわけで、うしろからツカツカで行って、「ヨイ」と気合いもろとも斬つど思つたら、これは魂消た。体がひらりと変つたら、利き腕を逆手にとらつた。

「これこれ、小僧何をする。余が剣道の心得あつたからこそ、今のお前の太刀をかわすことできたげんども、百姓町人のたぐいであつたら、お前に斬られでた。思えばまだ年端も行かないようだが、どういうわけだ」

「痛たたた……」

逆手しぼり上げらつた。

「小僧、キンタマをいろいろて見い、縮んでいるであろうが」

左手でキンタマをさわつてみたれば、棹の根っこさピターツとひつついてちちんでいた。

「そんなキンタマで人間は斬れるもんじゃない。みどものキンタマをいろいろて見い、おれのキンタマを触つてみろ。だれているだろう」

「はい、だれております」

「どちらの先生で…」

「うん、水道橋に住む千葉周作だ」

「それでは、あの千葉周作先生でございますか」

「そうだ。剣の極意を教えてやつから、そんなもんで斬れん。明日になったら、わしの道場さがして参れ」

て言うて、また右にふらふら、左にふらふらして行ってしまった。さあ、その逆手にとらった腕のいたいこと、家に帰ってきて寝た。

そして次の日早く千葉道場さ行った。ほして、「頼もう、頼もう」て言うたれば、十五・六才の少年、

「ダレキン先生はおいでですか」

て言うた。

「何だこの野郎、ダレキン先生なて、うちは千葉周作先生だ」

「はい、その周作先生でございます」

「おかしな野郎きたもんだな」

て、先生さ、取り次いだ。ほしたら先生が、「来たか、ちぢみキンが…」て言うたど。何だかキンタマのかけ合いしてるみたいだ。ほして有村治左衛門がその日から千葉周作の道場の弟子になった。そして、後に千葉道場の一番剣士、有村治左衛門これにありと言うほどの人になったんだけど。どんぴんからりん、すっからりん。

172 那須与一

むかしむかし、源平の戦いの折に、海に布陣するのは平家方、陸に布陣するのは源氏方、その戦さも長く続いた。むかしは非常に戦さなて言うてもノンキなどこあって、あの時、平家方から一艘の舟が源氏の陸の方さ漕ぎ出さつて来て、一人の官女がそれにのつていただけ。ほしてその舟の真中さ帆柱立ってで、その帆

柱の上さ日の丸の扇が立てられてた。きっとこの扇を弓の矢で打つてみるということだろう。こういうわけで、

「あの扇、誰か打ち落す者がいないか、誰かあらん」

て言うわけで、お触れが廻った。強弓では鎮西八郎為朝、命中では那須与一、こういう二人の弓の大家がいた。ほしてあれを射るには、那須与一だろう。空とぶ鳥も三羽のうち二羽は打ち落すという弓の名人、那須与一が選ばったわけだ。ところが那須与一、馬さのつて漕ぎ入れてみたれば、何と波は高い、舟はゆれる。一たんはねらいをさだめてみたげんど、どうしてもねらいが定まんね。これではとにかく仕損じてから恥をかくど何とも仕様ないと戻つてみたげんど、

「そうだ、どうせこうせ」

と言うわけで、そこで大盃で二・三杯濁酒をあおった。ところが酒飲んでグデングデンゆれるのと、波のゆれるのと一致して、ピタツと的が動かねぐ見えた。ここぞとばかり那須与一が弓をヒョーと射てやったら、扇の要かなめさそいつが当つて、そして日の丸の扇が宙天高く舞い散った。ほん時にいた源氏の方も平家の方

も賞賛した。

んだから、酒のんでおかしげなる人もいれば、酒のんで当り前になる人もいるつて、先には言うたもんだど。どんぴんからりん、すつからりん。

173 口立たぬ嫁

むかしむかし、ある村に非常にきれいな娘いだんだけど。

ところが、ほの娘は何だか口立ったな、あんまり他人も聞いたことないて言うていだんだど。んで、年頃になったもんだし、いやすばらしいええ娘だげんどなあ、なて話になつてだ。して、その娘ばほこの隣の村の、すばらしい旦那衆さ、ある人が仲人した。器量はええし、朝げ早くからせつせと稼ぐし、聞くところによれば、縫い針は何させても一丁前だ。どうだ、お宅でもらわねが。一口商いあきなで「もらった」て言うても、何だし、一口商いは嫌ったそうだから、

「んでは、家の方でも調査して」

なっているうちに、また別の人来て、

「お宅さ嫁仲人きたげんど…」

なて来た。ところが、

「誰れさんが、どこそこの娘仲人してつたぜ、ええ娘だす、読み書きも出^でつす、縫い針は一丁前だし」

と言うわけで、言うて行つた。ほしたれば、

「うーん、あそこの親父が、あいつあ千三つだ、千語るうち、三つしか当らね^なだ」

「はあ、千三つか、ほんでは分んねかな、何だか」
ていた。

ところが早く仲人した人がヒヨコヒヨコと来たけあ、

「なぜ決めて呉^けだまず、行つてみるばかりも見ねがまず」
て言うた。

「いやなあ、実はお前の村の誰それさんていうの来たけあ、お前ば千三つなて言うてった。ほんでなくてさえも、仲人ざあ嘘こきだ、嘘こきだつて、嘘のこき上げと仲人の仕上げは同じだと、先せんにから言うたもんだ」

「何だ、誰それ親父言うたの、当てなんね」

「んだて、ほう言うて行つたも、お前ば千三つて言うたぜ」

「千三つなて、とんでもない。あの野郎なの万サラリンの万カラリンで、万言うてさっぱり当らね野郎だ」

「はあ、ほうか」

ていだ。んでは千三つの方がええて言うわけで、千三つの言うこと聞いて、その嫁さんもらった。ところが、万サラリンが言うた通り、口立たね。

「へえ、これは唾であんまいか、オツツ（唾）だべ、こりや、こだなもの仕方ない、こりや返して来んなねべ、こりや」

て、姑おつかちゃんが連れて、ほして帰してくんべと思った。ところがある原っぱまで行ったら、キジがケンケンて言うたと思つたら、鉄砲の音がドガンとした

けあ、キジ、バサラと落っだ。

したれば、ほっちの方振り向いっただけあ、ほの嫁さまは言うた。

「キジもケンケン鳴かずば打たれまい」

て言うた。ほうしたれば、その姑かあちゃんが、

「ああ、何だ、こだい立派に、しかもええ時期に、ええ言葉立つなだ。これは啞や何かでない。人間は一番のわざわいは口からだ。んだから無駄口喋らねな、これは女の鏡だ。連^せて行って、家の嫁にすんなね」

て言うわけで、そこからいきなり戻ってきて、そこの若奥様におさまったけど。どんぴんからりん、すっからりん。

174 猫の子は猫

むかしあつたんだど。

あるどこさ猫の子生まつたんだど。ほうしたれば、猫の親、

「何て名前つけたらええがんべなあ、とにかく世の中、荒くなくてはなんねえから、一番荒い名前つけんなね」

「一番あらいて言うたら、何言うたて、お天道さまだべ、お天道さまで名付けたらなんだべ」

「いや、お天道さまなの駄目だ、雲がかかれば何も見^めねぐなってしまう」

「雲と名付けっか」

「ほだな雲なの分かるもんでないっだ。風くつどすぐ吹つとばされる」

「んじゃ、風、お風とでも名付けっか」

「風など、板塀あつど何にもならね、板塀のかげ、さっぱり風吹かね」

「板塀とでも名付けっか、ほんじゃ」

「何、板塀なの大したことない。ねずみにかじられっど、何にもならね」

「んでは、ねずみと名付っか」

「ねずみなの、猫に食れっど何にもならね」

て言うて、やつぱり猫の名前は猫だっど。どんぴんからりん、すっからりん。

175 嫁の屁

あるどこで、先に、御説教聞きが流行^{はや}つてだ。どこの家でもその説教聞き行ぐがった。ほして、ほこの姑かかさま、嫁ば引張つて歩った。なしてて言うど、自分^{自分}がたれた屁、嫁さかんづけ、かんづけした。そのため自分ばり歩くと、「あの人、たっだ」て言われるもんだから、嫁ば引張つて歩った。

お寺さまさ行つて、説教きいた。いよいよ説教がセメに入つてたれば、我慢しつたげんど、そのおかちゃんが一発やらかした。ブウッー。

ほうしたけあ、いきなり嫁こ見た。

「なんだべ、このありがたいとき、屁なのたれて、ひどいもんだ、ひどい嫁なもんだ」

て言うたて。はいつ聞いただけあ、お寺さま気の毒がつて、

「ブツとたれれば、仏法のはじまり、スウーとたれれば、すぐ極樂」

「あらら、んたべか、お寺さま。んでは今んの、嫁でない、おれだった。んでは名前つけで呉^けらっしゃい」

「名前、何と言うた」

「柳町の弥兵衛かか、お屁^{へい}のお松ざあ、おれごんだ」

て言うたれば、聞いた人はみなアハハ……て笑ったて。どんぴんからりん、すっからりん。

176 東北の食い倒れ

東北の方さ、ある人が旅に来てみたれば、関東の着倒れ、東北の食い倒れということ聞いた。

そしてあるどころさ来たれば、自身番小屋あつたつけ。東北の方では自身番小屋、先に、火事とか泥棒とか守つたんだげんども、その自身番小屋さ、春先、キセルなのくわえて歩くど、危ないもんだから、「くわえキセル無用」て書ிட்ட。ところが関東から来たお客さま、はいつ、つくづく見ただけあ、

「食うはええ、着せる無用」て読んだ。

「ははあ、なるほど、東北は食い倒れだ」

て言うたど。どんぴんからりん、すっからりん。

177 家賃とり

むかしとんとんあつたけど。

親父と息子いだけれども、何^{なえ}つたて家賃払わなね。んだから今日はきつと大家さんが来つかもしんないから、

「ええか、おつつあんが押入れの中さ隠つて寝でっから、大家さん来たら、不在だつて言え、そうすつど大家さんが戻つて行んから」

「はい」

さつさと開けで、

「今日は、キン坊キン坊、おつつあん、どさ行つた」

「おつつあん、不在だ」

「不在だなて、不在でないべな。んだてなあ、キン坊、お前のおつつあんがどさも出はつて行がねな確かめて、来たんだぜ」

「んだても、不在だも」

「不在だなんて、キン坊、不在の意味知ってたが、お前」「知ってだ」「どういう意味だ」

「押入れの中さ入って寝るごんだ」

どんぴんからりん、すっからりん。

178 キビとアワ

あるとき、友だちが一生懸命で畑の草とりした。ほうしたれば、ほこ通りかかって、

「おう、君、^{きび}何した」

「なんだ、おえない野郎だ。人ばキビだの何だのて言うて。んだらば帰り、おれの野郎ばアワて言うて呉^けらんね」

て言うた。どんぴんからりん、すっからりん。

179 和尚と小僧

和尚さまがある時、小僧さ言った。

「世の中、諸式が上がって、世知辛くなつから、何でも儉約して使わなくてなんねえ。ええか、例えばチリガミでも、ほだ。鼻かんだら、はいつちやんと折って懷さしまつてで、乾いた奴で、こんどは便所で、はいつ使わんなね」

二・三日おもつたれば（経つたれば）、

「和尚さん、和尚さん、いや、つまんね」

「何してだ^な」

「いや臭くて、つまんね」

「なぜした」

「便所さ行つて、のこつた奴、懷さしまつてで、はいつで鼻かんだ」

「この馬鹿野郎、はいつ、反対だ」

どんぴんからりん、すっからりん。

180 小便たれ

あるところに、とってもズベラなじんつあいだ。外さ行つて小便たれんな嫌やんだから、板塀の孔ぼこから、チンポコ出して、小便たれたれした。

ところが、はいつ鶏は、何だか変な虫出はつてきたと思つて、突つついて食つてしまった。ほうしたれば、鶏は次の日から鳴き声變つたんだどはあ。何だかおかしげキイッて鳴くと思つたれば、そして二・三日おもつたれば、きれいな声でキンキラキン、キンキラキンで鳴くようになったけど。どんぴんからりん、すつからりん。

181 欲ばり犬

むかしとんとんあつて、あるところに非常に欲ばりな犬いだけど。ほしてすばらしい大きい魚、どこかで見つけて、くわえてきた。

ほして、橋の上トントン、トントン渡つてきて、ちよいつと下見たれば、自分がくわえつた魚よりまだ大きい魚、水鏡さ写らつた。はいつも欲しくなつて、その犬がワンと吠えだれば、魚がジャポンて川さ落つてしまつてはあ、犬あどつちの魚もはあ、食んねぐなつたどはあ。んだからあんまり世の中、欲ふかくはすんなていうたもんだけど。

182 カステラ

むかしむかし、長崎ていうどこさ、オランダ人が来て、カステラていう、お菓子を寄付した。日本のある人が、

「いや、うまいお菓子なもんだけ」

て、譲ってもらって食った。あんまりうまいもんだから、皮がらみ食った。ほうしたればオランダ人が笑った。

「あら、皮がらみ食ったりや。あの馬鹿野郎、皮がらみ食った」
したれば、

「皮捨てた、皮捨てた」

て言うた勘定だげんども、そいつがカワステラ、カワステラになって、カステラになったど。どんぴんからりん、すっからりん。

183 嫁の団子

嫁と姑いて、ほの嫁さま、姑いねどき、何とか腹いっぱい食つてみたいと、やかましくてやかましくて、おかちゃん居つどき、腹いっぱいも食んね。三杯目なの出す勘定すつど、にらめられる。

「くそ、こりや、腹いっぱい食つて見っだいなあ」

ていた。ほしてある時、姑おかちゃんが用達し行つたどこ見て、いきなり団子の粉練つて、ほして団子搗き始めた。ほうして熱くして醤油つけて食うべと思つたどこさ、おかちゃんが来た。つうと食い始めつだった。いきなり熱いな呑んでやつた。そして向うの方見て、知しやねふりして、

「おかちゃん、おかちゃん、あの山、何ていう山だつす」
て言うた。

「な、あの山ざあ、団子喉焼け山て言うなだ」

「はあ、ほんでは、おら方の、アテツケ川だいなだつたなつす」

て言うた。どんぴんからりん、すっからりん。

184

おなべとおふた

あるとき、孫とばんちや、お祭りさ行^いった。ほしたら、ばんちやが語^いって行^いんけ、

「いやいや、世の中ざあ広いもんだな、おなべなて言う名付^いかった人いたぜ、おふた」

なて語^いって行^いんけ。

一休和尚ていうて、小僧の時代から非常に頓智がええがった。ほいつ殿さまさ聞えだ。ところがあるとき、意地のわるい奉行がいて、一休ば呼ばて、

「最近、鼻毛伸ばしていつから困らせて呉^けんべ」

て言うわけで、「二休、一休、こいつ当てるいが」て言うて、手さ雀^{たが}持つて、

「この雀、生きつだか、死んだか当ててみろ」

こう言うた。一休はニコニコしながら、

「はいつ当てねごどもないげんども」て言うわけで、闕さまがって、

「んだら、おれのから当ててもらわんなね。おれは右さ行んか、左さ行んか、当てて呉らつしやい。当たたらば、雀生きつだか死んだか当ててあげっから」

「参った」

生きつだて言えば殺すべし、死んだて言えば生きつだま出すべし、ちゃんと一休小僧に見抜がった。ほしてくやしくていだらば、殿さまからお使いが来た。

「なんぼ一休でも、絵図さ描いた虎は縛れまい」

こういうわけで、ほして一休が呼ばらうで見たところが、ガンク、ガンカイト昔は虎描いては世界一と言わった、ガンクの虎、竹藪からすばらしい猛虎、口あいて猛虎ぶりを發揮して、そのすざましいこと、看板にいつわりなしのガンクの虎だ。

「そのガンクの虎を縛れ、どうだ、降参したか」

て言わった。そしたら一休和尚は、

「いや、描いた虎でも何でも縛る。んだげんども、わたしの縛り方は、投げ縄でしぼるんだ。竹やぶ邪魔になつて、何とも仕様ないから、その竹やぶから追い出してもらいたい。おれ、こっちの方で待つていつから、何とかそうしていただきたい。」

て言わったので、殿さまも参つてしまつて、虎追い出さんねがつたど。

「追い出さんね虎、縛らんね」

て言わったで、これも何とも仕様なくて殿さま、一休和尚に負けてしまつたど。

どんぴんからりん、すっからりん。

186 彦市ばなし — かくれみの —

ある岡に天狗さま出て、ほしてかくれみの着てきてはあ、人の酒ひったぐったり、あるいは油揚げひったぐったりして、狐並な悪れごとする。

天狗さまなて言うど、ええ事ばりすると思つたら、そうでもない。とんでもない天狗さま居た。ほの天狗さま退治するには、何言うても、あのかくれみの取つてしまわなくては嘘だていうわけで、一策を案じた。

彦市がそこさ、竹ば節抜いて持つて行つた。^{たが}ほして、

「いやいや、みな見える、この遠眼鏡は見える、アメリカンからイギリスユからみな見える。すばらしい遠眼鏡だ。海の方から山の方からみな見える。おもしろい、おもしろい」

て言うたれば、天狗さま、ノソリノソリと降^おつできたけあ、

「これこれ、小僧、そんなに遠眼鏡ざあ見えるもんだか」

「こいつあ見える、見える。すばらしく見える。ときに天狗さま、相談だげんど、かくれみのと、この遠眼鏡とりかえねえが」

「うん、はいつは面白いべな、どれちよつと見せてける」

「いや、天狗さま、駄目だ。こいつあ三日おもわねど、効力発生しねなだ。その人に渡つてから三日おもわねど、見えねなだ」

「ほうか、うん、困つた眼鏡なもんだな」

「見える、見える、ほりやほりや、アメリカあたり人力車走つてあるぐ、こつちはこうだ、ああだ」

て言うた。天狗はムラムラ欲しくなつて、かくれみの、彦市さ渡して、竹ツポ交換して家さ持つてきて隠しつたはあ。天狗は、

「明日から、いよいよ見えつぞ」

三日目なつても何にも見えね。ほうしたけあ、「はかられた」

んだげんども、彦市がかくれみの着てるもんだから、どこへいたかさっぱり探さんね。ほうして、ほうほうの態で、そっから逃げて行つてしまった。そこからそこさ天狗ざあ出ねがつたて言うわけだ。どんぴんからりん、すっからりん。

187 彦市ばなし — 狐と狸 —

その彦市が、きつねやたぬきと非常に仲よしだった。ある時、ちよえつと彦市が田んぼさ行つてみたれば、砂利だ茶碗かけだ、瓦だて言うの、みな田さ入^いつでだ。はいつあ、ほの狐やたぬきのいたずらだていうことをピーンときた。彦市が怒鳴った。

「いやいや、ええ肥料^{こやし}してもらったもんだ。こりや、石ころも三年経^たつと小便たれるつて言うし、瓦肥料に瀬戸かけ肥料、こだいええことない。今年は大豊作だ。こいつ、ほに、馬糞なの、人糞なの入れらつたんだら、ほれこそ田、だいなしだつ

た」

ほいつ狐聞いっただけあ、むんつん野郎べらなもんだから、次の日、瀬戸かけや瓦かけ、すぱっと片付けて、馬の馬糞みな田さふつ散らかしたけ、ほして彦市にええあんばい狐たぬきだ、はからっただけど。どんぴんからりん、すっからりん。

188 天とひばり

むかしむかし、ひばりの先祖が、お空さ粟一斗五升貸した。何日何十日たつてもお空がほの一斗五升の粟^な済さね。ひばりが相談した。

「こりや、催促屋いねがらだべな」

て言うわけで、ひばりが毎日お空さ一斗五升の粟返してもらうように、八千八声の催促しねうちは食事さもつかんねし、巢作りもさんねし、子ども作りもさんねし、まず朝げ、夜明けっどからはあ、お空さ行つて、粟の催促すんなね。パイ

ピーピーで。そして始めて食事する。ほんでも今もってお空ではほの一斗五升の粟返してけねんだから、ひばりだ、今だにまだ朝早くから、あるいは暇暇に、夕方までも、お空に対して、

「粟^な済してけろ、粟^な済してけろ」
て、さえずるなど。どんびんからりん、すっからりん。

189 茶 臼 山

ここはサネモリ公の茶臼山の一戦。蛤御門の変。御時間の見えますまで…。カリタカ公の軍勢と申せば、やあやあ、遠からん者は音にも聞け。近からん者は目にも見よ。

侍大將はアンドンケスベエ、ケツカワクラベエ、クラカワシベエ。ベエのついたり若武者たち。そしてヘソシタ^{こおり}郡、ケムチャ村に陣取って、いざ宿敵ござんな

れとの構え。

一方サネモリ公の軍勢と問えば、ムラサキナスビのスケ、ヌカヅケ、シロイダ
イコンのスケ、アサヅケ、赤い人參のスケ、キリボシ。その他ヘビカミ軍、大よ
そ千二百匹ほど。サネモリ公とて同じこと。ヘソシタ郡のマタグラ谷、コカンの
繁みに陣どった。カリタカ公に勝利の女神がほほえみますか、またサネモリ公の
頭上に栄冠が輝きますやら、時は一刻一刻と迫ってくるのである。カリタカ公の
進撃いちじるしく、大将同士の一騎討ちとなった。紫頭巾を着用し、青筋ばりの
鎧を着用してふんぞり返ったカリタカ公、七尺有余の禪をサヤリと払いのけ、い
ざ一突きとサネモリ公めがけて突進した。サネモリ公心得たりと腰をひねって受
けとめたり。どんぴんからりん、すっからりん。

190 ピョンピョコの助

奥州出羽の国生れのピョンピョコの助という人が、難波の国さ奉公に行った。ほして一生けんめいむしっていたれば、お姫さま出はつてきて、

「こりや、ピョンピョコの助、休んだらあかんで
て言うど、

「おれあ、休むて言うたわけであんまいし」
いきなり休んで呉だ。ほしたらお姫さま、

「あら、ピョンピョコの助、休んだからには仕方おへん。わたしの傍になんか来
ちや、あかへんで」

「おれは傍さ行くなて言うたわけであんまいし」
いきなり傍さ行つて呉^けだ。

「あら、ピョンピョコの助、傍に来るなと言^ゆわはつたに、来たから仕方おへん。
座敷にお布団なんか敷いてはあかんで」

「おれは、お布団敷くなんて言うたわけであんまいし」

いきなり布団敷いて呉^けだ。

「あら、ピョンピョコの助、敷くなど言うたに、敷いたから仕方あらへん。うちの傍に来て寝あはつてはあかんで」

「おれあ、傍さ行つて寝るなて言うたわけであんまいし」
いきなり寝て呉^けだ。

「あら、寝るなて言うたに、寝たからは仕方おまへん。うちのものとあんたはんのもの合せたりしてはいけまへんで」

「おれは合せるなて言うたわけであんまいし」
いきなり合せて呉^けだ。

「あら、ピョンピョコの助、合せてしもうたからには仕方おまへん。くいと押したりしてはなりまへんで」

「おれは押す、なて言うたわけであんまいし」
いきなり押して呉^けだ。ほうしたれば、

「あら、押しやんな押しやんなて言うたに、押しやったがらには仕方ありまへんで、こんどはなあ、腰。ペク。ペクさせてはいけまへんで」

「おれあ、腰。ペク。ペクさせるの何だのて言うたわけであんまいし……」

今度は右さん、左さん、水車。右さ三べん、左さ三べん、あとはうなぎの背のぼり、ニヨロリニヨロリと、あとは落花の乱れつきと、こういう風にやった。ほうしたれば、お姫さま、

「しやんな、しやんなて言うこと、皆しやはってあかん子だね。この人は。ただけどな、このことばかりは誰にも言わしやんすなよ」

「おれは人さ喋るなて言うたわけであんまいし」

ほこらここらさ、お姫さまのこと、みな喋って呉^けた。どんぴんからりん、すっからりん。

191 阿呆陀羅經

アホダラキョウで申します。

隣のおさんも年頃で、ビンツケ油をコテシコテシとぬりつけて、お尻^{けつ}をなでたりお腹^{なか}をなでたり、パカポコ、パカポコ。

親からもらった四両二分、使い過して借りだらけ、隣のおさんが引受けて、とうとう十月で産しました。ああ、パカポコ、パカポコ。

頭の光ははげ光り、ホタルの光は尻^{けつ}光り、親父の光は七光り、かかの光はくそにもならぬ。パカポコ、パカポコ。

権兵衛が種子まき、烏がほじくる。かならずこれを見習って、人のカサなのほじくるな、それさえなければ国家安泰、家内安全。パカポコ、パカポコ。

会いたい見たい顔みたい、顔見りや一度は話してみたい、話すりや一度寝てみたい、寝てみりや一度はしてみたい。パカポコ、パカポコ。

第四回目の佐藤孝一氏への昔話採訪は二月十八日であった。

宿場町であったことが、いろいろな面で佐藤家の昔話に影響を与えているように思われる。特に一八六、一八七の「彦市ばなし」はどうして入って来たものか分からないという。しかし山形の最上家や秋田の佐竹家の宿などもあって、それにちなんだ昔話もあるところから、街道を通って来たものも想定される。またこのような街道だったから、越後瞽女や説教語りなど、さらには祭文語りなども入り込み、祭礼などはにぎやかであった。祭文語りの話の一つは「阿呆陀羅經」一九一であったという。祭文は木びき連中と仲よかったというから、彼らの落として行ったものも多かったかも知れない。

これらの他に「お尼さま」が梔をもって門付けしたし、正月には万才などもやってきたものであったという。祭りのときのアママイもなつかしいという。

佐藤家の昔話の中には一口話、艶話、笑話などの世間話風のものが極めて多く、

また江戸時代に形をなしたと思われるものが多いのは、いかにも佐藤家がお伽衆の流れを受け継いでいるということと関係があるように思われなくもない。お伽衆ともなれば、聞き手にすべて興味を起こさせねばならないし、特にこのようなお伽衆の語る座そのものが、若い人々の集まりの場が最も多いとすれば、どうしても世間話への傾斜は当然であつたろう。

しかし同時に、そのような世間話が本格的な昔話の上に築かれている点で佐藤家の特色があるように思う。絵本になつている昔話や、一般に流布している昔話は後廻しにするという佐藤孝一氏のことだから、今後がまたたのしみである。

また年中行事にちなんだ昔話が多いことも、昔話の話数の多寡と関係があるように思われるし、格言などと結びついたもの、村のしきたりを昔話の形で語るのも、お伽衆という、当時の知識階級（層）の仕事だったのではなからうか。

三月十八日

武田 正

天とひばり

佐藤家の昔話(四)

昭和四十八年三月十八日 印刷・発行

編者 武田 正

南陽市三間通二三二の三

話者 佐藤 孝一

佐藤家の昔話と『日本昔話集成』比較

佐藤家の昔話 I

- | | |
|----------------------|----------------------------|
| 1 ままこ | 18 和尚と小僧（小僧改名 543） |
| 2 むじなむかし（山梨の怪・系） | 19 初夢の話（三人兄弟 174） |
| 3 狐に駕入り（狐の婚礼 273） | 20 おりや峠の蛇 |
| 4 屁たれ嫁（屁ひり嫁 377） | 21 鴨とり吾平（鴨とり権兵衛 464） |
| 5 果てなし話（果てなし話 641） | 22 雑煮餅 |
| 6 赤羽又右衛門の力自慢 | 23 大歳の火（大年の火 202） |
| 7 三尺安兵衛 | 24 とりおやじ① |
| 8 夢の蜂（夢買長者 158） | 25 とりおやじ② |
| 9 法印と狐（山伏狐 275A） | 26 姥皮（姥皮 209） |
| 10 豆腐・大根・人参・牛蒡 | 27 嘘つき屋（法螺童子 492） |
| 11 文福茶釜（文福茶釜 237B） | 28 讃岐の吉内（吉内ばなし 550） |
| 12 三人の死人 | 29 三枚のお札（三枚の護符 240） |
| 13 猫の恩返し（猫檀家 230） | 30 桑原桑原 |
| 14 今若童子 | 31 タコに骨なし（猿の生肝 35） |
| 15 雀と猿（猿蟹合戦 25） | 32 狐むかし |
| 16 赤い小箱（花咲爺 190） | 33 大平の狸と狐の柳兵衛（狐と狸の化比べ 287） |
| 17 源五郎鮒（源五郎の天昇り 463） | 34 ドッコイシヨ（仁王と賀王 48） |

鳥呑爺 佐藤家の昔話 II

- | | |
|---------------------|----------------------|
| 35 蛇女房（蛇女房 110） | 47 茸化物（宝化物・系） |
| 36 観音さまの手助け | 48 貧乏の神と福の神（貧乏神 201） |
| 37 一雨成金 | 49 二反の白（二反の白 485） |
| 38 水蜘蛛（水蜘蛛 669） | 50 弘法手拭（宝手拭 198A） |
| 39 天狗岩 | 51 かおすと狐（川獺と狐 3） |
| 40 鼻水地藏 | 52 夢見ばなし — 大唐傘とクジラ |
| 41 姥捨（親棄山 523A） | 53 夢見ばなし — バッターと鬼 |
| 42 山の神の遠眼鏡（嘘八卦 630） | 54 「件」の由来 |
| 43 鳥呑み爺（鳥呑爺 188） | 55 杞という人 |
| 44 化物寺 | 56 太公望のはなし |
| 45 兄弟話（法事の使い 333） | 57 二十四孝 |
| 46 片鬚片眉毛（三尺草履 393） | 58 蟹の恩返し（蟹報恩 104B） |

- | | | | |
|----|--------------------|----|---------------------|
| 59 | 塞翁が馬 | 76 | お月さまの兎 |
| 60 | 朝鮮人参 | 77 | 金売り吉次 (炭焼長者 149) |
| 61 | 人身御供 (猿神退治・系) | 78 | 炭焼き藤太 (炭焼長者 149) |
| 62 | 梅檀は双葉より芳し | 79 | 若返り水 (若返り水) |
| 63 | 子授けの神 | 80 | 貉むかし |
| 64 | 大岡裁き ― 味噌コガに金 | 81 | 狐の恩返し (狐の嫁取 285) |
| 65 | 大岡裁き ― 姑と嫁 | 82 | 大蛇の石 |
| 66 | 大岡裁き ― 町奉行になる大岡越前 | 83 | 子育て幽霊 (子育て幽霊 147A) |
| 67 | 大岡裁き ― 盗んだキセル | 84 | 思い川のホタル |
| 68 | 大岡裁き ― 釜盗みのイザリ | 85 | 橋の渡り初め |
| 69 | 大岡裁き ― 里子と親 | 86 | 難題簪 (謎解簪・系) |
| 70 | 大岡裁き ― 蓮の葉往生 | 87 | 関根の由来 |
| 71 | 恐れ山で会った妻 | 88 | おんぶお化け (おぼっしょ 163C) |
| 72 | 年取りの唱え言 (米倉小倉・系) | 89 | 和尚と小僧 (和尚と小僧・系) |
| 73 | 物識りじんつあ (米倉小倉 412) | 90 | 古屋の漏る (古屋の漏 33A・B) |
| 74 | 十二支由来 (十二支由来 12) | 91 | 一言葉千両 (話千両 515) |
| 75 | 身籠る月 (十二支由来・系) | 92 | 納豆長者 (取つつく引つつく・系) |

鉢かつぎ姫 佐藤家の昔話Ⅲ

- | | | | |
|-----|--------------------|-----|--------------------|
| 93 | 狐と庄屋 (尻のぞき 270) | 108 | 寄合い触れ |
| 94 | 化け石 (髪剃狐 272) | 109 | 鶴女房 (鶴女房 115) |
| 95 | 床屋狐 (仇討競争 624) | 110 | カスベの由来 |
| 96 | 申し子むかし (子供の寿命・系) | 111 | 白雀 |
| 97 | 稲二把村 | 112 | 金平神楽 (吠狐 280) |
| 98 | 谷風と三吉つあま | 113 | マタタビの由来 |
| 99 | 義家と朝茶 | 114 | 蛙と牛 |
| 100 | 名前の由来ばなし (蚯蚓と土 75) | 115 | 子育て幽霊 (子育て幽霊 147A) |
| 101 | 大根むかし | 116 | 鉢かつぎ姫 (鉢かつぎ 210) |
| 102 | 三尺安兵衛 | 117 | 嫁の歯 (嫁の歯 375) |
| 103 | 島田より丸髻 | 118 | 小人と大人 (小さい較べ 483) |
| 104 | 団子簪 (団子簪 362) | 119 | 闇夜ふみ |
| 105 | 尻にまんじゅう (尻に団子 358) | 120 | 関根柿の由来 |
| 106 | 銭・馬・土瓶 (一つ覚え 330) | 121 | 女郎狐 (遊女狐 239) |
| 107 | 運のええ馬鹿簪 (愚か簪・系) | 122 | 死神 |

123 一休和尚
124 三つの口
125 蟻と鳩
126 黒焼先生
127 油断医者
128 宝生の玉
129 田吾作
130 秋田の殿さま
131 風呂屋の娘
132 殿さまの太鼓
133 三ツ目

134 カワラ毛
135 目立て
136 後家
137 屁つかみ
138 狸の化物①(狸の八畳敷 266)
139 狸の化物②
140 蘭学の名医
141 屁たれ嫁
142 乞食
143 一生無年貢

天とひばり 佐藤家の昔話Ⅳ

144 お釈迦さまの悟り
145 お釈迦さまの弟子
146 お釈迦さまの涅槃
147 左甚五郎のねずみ(鼠の名作 588)
148 左甚五郎の竜
149 左甚五郎の猿
150 左甚五郎のかきつばた
151 左甚五郎のねむり猫
152 こぶとり(瘤取爺 194)
153 雷さま一家
154 木の精のはなし(子供の寿命 152)
155 蛇髻(蛇髻入 101)
156 貧乏神(貧乏神 201)
157 団子浄土(地藏浄土 184)
158 狐むかし(狐の婚礼・系)
159 笠地藏(笠地藏 203)
160 金の斧・銀の斧(黄金の斧 226)
161 長い名の子(長い名の子 638)
162 日吉丸(和尚と小僧・系)
163 納豆の由来①
164 納豆の由来②
165 疫病神
166 三平と藤吉郎
167 円山応挙の猪

168 木下藤吉郎と明智光秀
169 宇都宮の吊天井
170 家光公の禪
171 有村治左衛門
172 那須与一
173 口立たぬ娘(長良の人柱 662)
174 猫の子は猫
175 嫁の屁
176 東北の食い倒れ
177 家賃とり(借金取の香典 568)
178 キビとアワ
179 和尚と小僧
180 小便たれ(出たものは切る 614)
181 欲ばり犬
182 カステラ
183 嫁の団子
184 おなべとおふた
185 一休ばなし
186 かくれみの(隠れ蓑笠 468)
187 狐と狸(石肥三年 472)
188 天とひばり(雲雀と金貸 67)
189 茶白山
190 ピョンピョコ助
191 阿呆陀羅經

東北文教大学短期大学部民話研究センター資料叢書

天とひばり 佐藤家の昔話(四)

*本書は、ガリ版刷りで作成された原本を活字化したものです。

平成二十二年十二月十日

東北文教大学短期大学部民話研究センター

〒九九〇―二三二六

山形市片谷地五一五

東北文教大学・同短期大学部附属図書館内

(電話)〇二三―六八八―七五四四

- 『西川町の昔話』(一九七五年九月発行、二〇〇六年三月再刊)
『むかしあったけど』(一九七五年二月発行、二〇〇六年三月再刊)
『米沢市築沢の昔話』(一九七二年十一月発行、二〇〇六年三月再刊)
『米沢市塩井の昔話』(一九七三年十一月発行、二〇〇六年三月再刊)
『安楽城の伝承(一)』(一九八四年四月発行、二〇〇六年三月再刊)
『安楽城の伝承(二)』(一九八五年四月発行、二〇〇六年六月再刊)
『安楽城の伝承(三)』(一九八五年十月発行、二〇〇六年六月再刊)
『高畠町和田の昔話』(一九七九年八月発行、二〇〇六年七月再刊)
『及位の昔話(一)』(一九八〇年八月発行、二〇〇六年七月再刊)
『及位の昔話(四)』(一九八〇年十二月発行、二〇〇六年十月再刊)
『及位の昔話(五)』(一九八一年二月発行、二〇〇六年十月再刊)
『佐兵ばなし』(一九七一年一月発行、二〇〇七年四月再刊)
『まま子いじめ 米沢市六郷・宮井の昔話(一)』(一九七四年四月発行、二〇〇七年四月再刊)
『かつぱの硯 長井市・米沢市六郷の昔話』(一九七四年七月発行、二〇〇七年四月再刊)
『行けざんざん 小国町昔話集』(一九七六年九月発行、二〇〇七年四月再刊)
『お婆の手ん箱(一) 阿部キヌオさんの語り』(一九七七年四月発行、二〇〇七年七月再刊)
『及位の昔話(二)』(一九八〇年九月発行、二〇〇七年七月再刊)
『及位の昔話(三)』(一九八〇年十月発行、二〇〇七年七月再刊)

- 『牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第一集』(一九六八年三月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『続牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第二集』(一九六八年十月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『続々牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第三集』(一九六九年一月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『牛方と山姥(四) 海老名ちやう昔話 第四集』(一九六九年四月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『飯豊町昔話集―大平・新沼・高畑―』(一九七一年九月発行、二〇〇八年四月再刊)
- 『蛇むこむかし しらたかの民話』(一九六六年二月発行、二〇〇八年四月再刊)
- 『お杉お玉 小国町昔話集(一)』(一九七〇年二月発行、二〇〇八年六月再刊)
- 『さとりのお化け 小国町昔話集(二)』(一九七〇年八月発行、二〇〇八年六月再刊)
- 『鬼と豆のくいくら 小国町昔話集(三)』(一九七〇年十月発行、二〇〇八年六月再刊)
- 『田の中の田三郎 近きよ姫昔話』(一九六九年八月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『お糸唐糸 故安部忠内翁／安部はつよ姫 米沢の昔話集』
(一九六九年九月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『つゆふじの伝説 安部忠内・稿』(一九六九年十一月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『さるむこ 田沢の伝説と昔話』(一九七六年一月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『ちようじやのむこ』(一九七六年一月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『飯豊山麓 中津川昔話集(上)』(一九七〇年十二月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『飯豊山麓 中津川昔話集(下)』(一九七一年一月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『木小屋の生活 民話序説』(一九七二年四月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『カマイタチ 東根昔話集2・置賜昔話補遺』(一九七二年五月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『川崎みさをさんの昔話』(一九七九年一月発行、二〇〇九年七月再刊)

『なら梨とり 赤湯の昔話』(一九六七年一月発行、二〇〇九年十二月再刊)

『置賜平野の昔話(一) 民話のこころ(対談) 浜田広介先生と海老名ちやうさん』

(一九七一年四月発行、二〇〇九年十二月再刊)

『置賜平野の昔話(二) 海老名ちやう昔話補遺』

(一九七一年八月発行、二〇〇九年十二月再刊)

『たかみねと秋田の昔話』(一九七八年二月発行、二〇〇九年十二月再刊)

『佐藤家の昔話(一) 山形県上山市檜下』(一九七二年七月発行、二〇一〇年七月再刊)

『鳥吞爺 佐藤家の昔話(二)』(一九七二年九月発行、二〇一〇年七月再刊)

『鉢かつぎ姫 佐藤家の昔話(三)』(一九七二年十二月発行、二〇一〇年七月再刊)

『天とひばり 佐藤家の昔話(四)』(一九七三年三月発行、二〇一〇年十二月再刊)

『へらへら話 佐藤家の昔話(五)』(一九七三年七月発行、二〇一〇年十二月再刊)

『夢のほたる 佐藤家の昔話(六)』(一九七三年十一月発行、二〇一〇年十二月再刊)

『ぬるくす男 佐藤家の昔話(七)』(一九七四年十月発行、二〇一〇年十二月再刊)